

社会科，地理歴史科，
総合的な学習の時間等の
授業づくりに活用したい

鹿児島県の歴史概観

「鹿児島県はどのように歴史を刻んできたか。」



《夏の燃ゆる桜島》

鹿児島県総合教育センター

はじめに

鹿児島県はどのように歴史を刻んで来たのでしょうか。

鹿児島県の歴史を一言で語ることは、もちろんできません。

本講座資料は、各種の資料を基に鹿児島県の歴史の概要を掴むことができるようにし、これを主に学校における郷土教育の推進に資することを目的として作成しています。そのために、まずは現在の日本史の研究成果を基礎とし、各時代の特徴を全国的な視点から俯瞰するようにしました。次に、鹿児島県域ではどうであったのか、特徴的な事象を挙げて検討できるようにしました。これは、小・中・高等学校等の歴史の学習において、鹿児島県域の状況も加味しながら指導に生かすことを目指したものです。また、総合的な学習の時間においても活用できるかも知れません。このことによって、本県の郷土教育の推進に幾分なりとも寄与できれば、有り難いことであると思います。

また、本稿では、全体としては「鹿児島県はどのように歴史を刻んできたのか」という大きな学習課題を解決することを目指しており、いわゆる課題解決的な学習の形態にしました。

ただ、解決した結果の「まとめ」は行っていません。したがって、ここで示した歴史的事象の資料を基に、身近な地域の歴史についてよく調べ、これを活用し、各校における郷土教育の授業の中で課題解決を図っていただきたいと思います。課題解決のためには、ここに示す以外の資料や知識も必要です。鹿児島県立図書館には郷土史料のコーナーがあり、資料や文献が充実しています。また、鹿児島市立図書館を始め、各市町村の図書館、郷土館にも貴重な資料や文献が所蔵されています。郷土教育は身近な地域の素材を生かすことから始めることが肝要であるため、資料発掘にも努めたいものです。学術的な新しい発見をするということではなく、既に明らかになっている歴史事象の中に、郷土教育の良い素材を見つけることで、良い郷土教育につながると考えられます。

最終的には、児童生徒が、「ふるさとを知り、ふるさとの良さに気付き、ふるさとを好きになり、ふるさとに貢献したいと思う」ようになってくれば、郷土教育の目的はおおむね達成します。そのためには、児童生徒自身にも、「鹿児島県はどのように歴史を刻んできたのか」を考えさせたいと思います。

なお、鹿児島県は明治4年(1871)7月14日の廃藩置県によって成立したものであり、「鹿児島県の歴史」は、厳密に言えば明治以降の歴史ということになりますが、本稿では、「現在の鹿児島県域の歴史」という意味で、原始(旧石器時代)にさかのぼってこれを紐解くことにします。

目 次

1	原始「旧石器時代」の鹿児島県域	-- 1
2	原始「縄文時代」の鹿児島県域	-- 3
3	原始「弥生時代」の鹿児島県域	-- 5
4	原始「古墳時代」の鹿児島県域	-- 7
5	古代「飛鳥時代～奈良時代～平安時代」の鹿児島県域	-- 9
6	中世「鎌倉時代～室町時代」の鹿児島県域	-- 15
7	近世「安土桃山～江戸時代」の鹿児島県域	-- 21
8	近代「明治～昭和時代(前期)」の鹿児島県	-- 27
9	現代「昭和時代(中・後期)～平成時代」の鹿児島県	-- 33

	日 本	東アジア	西アジア	ヨーロッパ
BC10000年	1 旧石器時代			
BC3000年			メソポタミア文明	
BC2000年		黄河文明		
BC1500年		殷		
BC1000年	2 縄文時代			
BC900年		周		
BC800年		春秋時代		
BC700年				
BC600年				
BC500年				
BC400年		戦国時代	アレクサンドロス帝国	ローマ（共和国）
BC300年				
BC200年		秦（前漢）		
BC100年	3 弥生時代	漢（後漢）		
1年				
100年		三国時代		ローマ帝国
200年		晋		
300年		南北朝時代		
400年	4 古墳時代	隋		西ローマ帝国
500年		唐		フランク王国
600年	飛鳥時代			七国
700年	奈良時代			
800年			東ローマ帝国	
900年	5 平安時代	五代		中 東 西
1000年		宋		
1100年				スコットランド
1200年		高麗		
1300年	鎌倉時代	元	（イル汗国）	
1400年	南北朝時代			
1500年	室町時代	明		ローマ教皇領
1600年	戦国時代			神聖ローマ帝国
1700年	安土桃山時代		李氏朝鮮	フランス王国
1800年	江戸時代	清	オスマン帝国	
1900年	8 明治	中華民國	エジプト	イギリス
	大正	日本領	トルコ	
	昭和		シリア	
2000年	9 平成	中華人民共和国	イラク	フランス
2015年		北朝鮮 大韓民国	イラン	

1 原始「旧石器時代」の鹿児島県域

世界大百科事典（第2版）によれば、旧石器時代は「人類の歴史上最古の、そして最も長い時代であり、約300万～200万年前に始まり、約1万年前に終わった」とされている時代である。主に更新世の末期に当たるが、日本の旧石器時代はヨーロッパの旧石器時代と完全には一致しない（【資料1-1】）。

考古学において、戦前は日本での打製石器の存在を確認できなかったが、【資料1-2】に示すように、相沢忠洋の発見によって更新世の日本に人が住んでいたことが明らかになり、その後、【資料1-3】に示すように日本各地での旧石器時代遺跡の発掘が進んだ。

この中で、鹿児島県域の遺跡としては、出水市の上場遺跡に注目したい。

上場遺跡について出水市歴史民俗資料館では、次のように説明している。

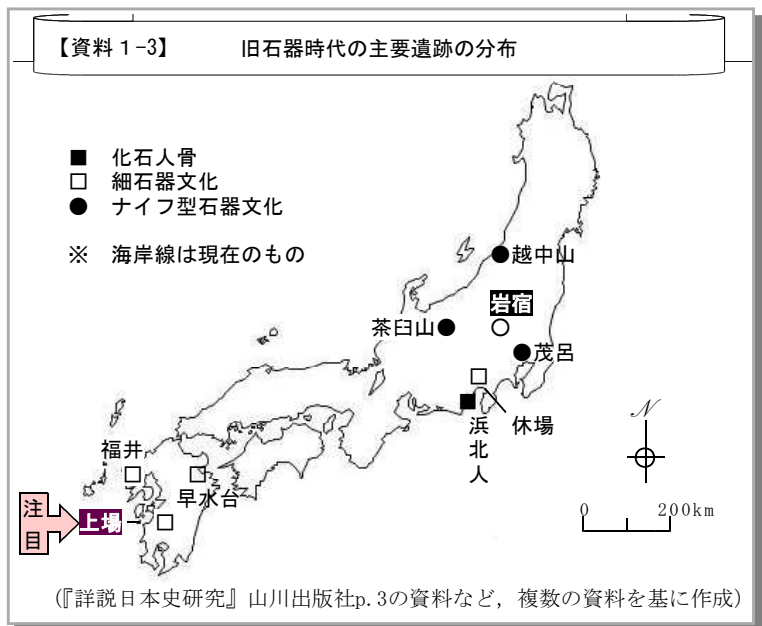
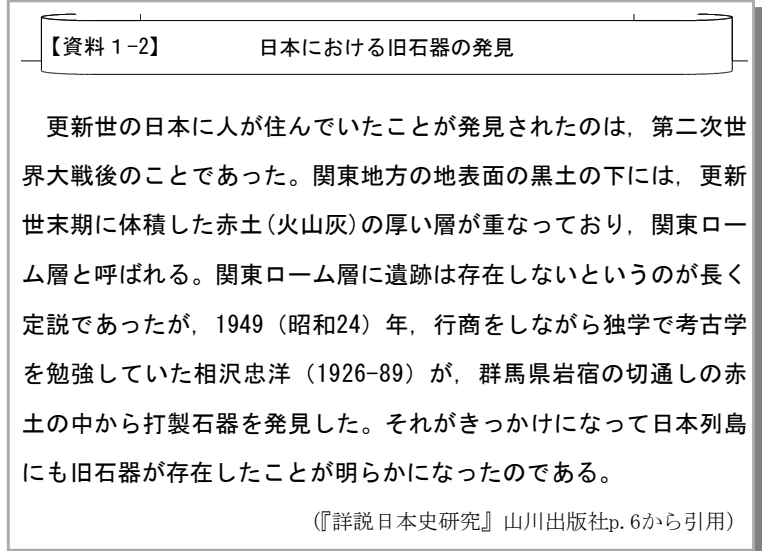
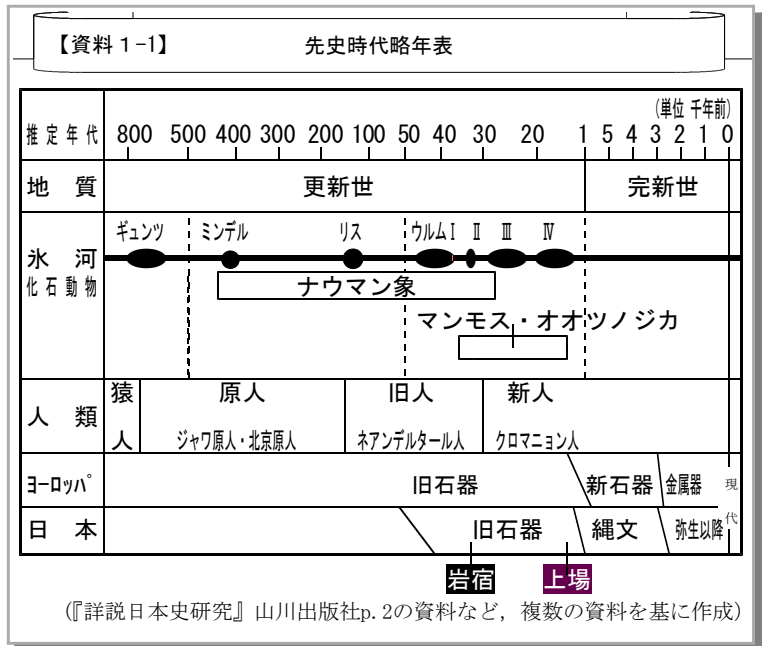
「東は伊佐市、北は熊本県水俣市と接する、標高約500mの上場高原一帯は、昔から黒曜石の石器がたくさん落ちている場所でした。出水高校の考古学部顧問であった池水寛治先生は、この一帯に以前から注目しており、たびたびの調査の結果、昭和40年、上場遺跡が発見されました。

昭和41年から始まった発掘調査は、上場遺跡だけでなく、周辺の数々の遺跡にも及び、多大な考古学上の発見がありました。中でも、日本初の発見として、旧石器時代の住居跡とされる竪穴が2基発見され、日本中の注目を集めました。」（下線は筆者。以下同じ）

旧石器時代に関する日本初の発見が、本県の高校教員の調査をきっかけとしていたことを理解しておきたい。

なお、上場遺跡の遺物は、出水市教育委員会に保管され、一部出水市歴史民俗資料館に展示されている。

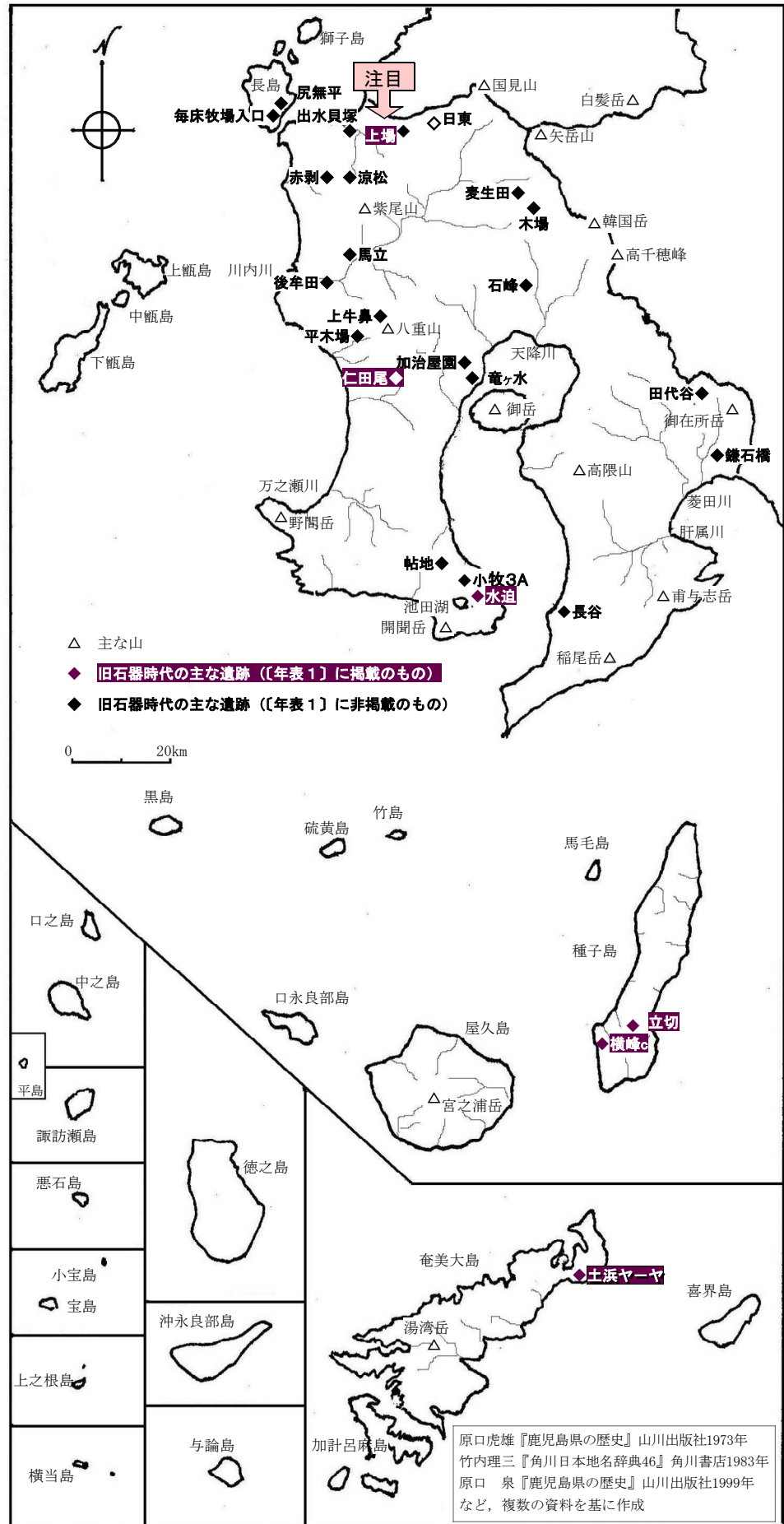
鹿児島県域の主要な遺跡については【年表1】及び《地図1》に示す。身近な地域の遺跡調査に活用したい。



〔年表 1〕

《地図 1》 鹿児島県域における旧石器時代の主要な遺跡の分布

年代等	主な遺跡
約 300万 ～ 200万 年前	〈更新世〉
約 164万 年前	旧石器時代 (先土器時代)
約 35000 年前	後期旧石器時代 ※ 岩宿遺跡 (群馬県)
約 31000 年前	立切遺跡 (中種子町) 横峰遺跡 (南種子町) 土浜ヤーヤ遺跡 (奄美市)
約 24000 年前	始良カルデラ が大爆発 (A T火山灰) 注目 上場遺跡 (出水市) 水迫遺跡 (指宿市) 仁田尾遺跡 (鹿児島市)
約 15000 年前	
約 13000 年前	縄文時代 草創期



2 原始「縄文時代」の鹿児島県域

縄文時代は「縄文土器を指標とする時代。縄文土器の変化によって草創・早・前・中・後・晩の六期に分け、放射性炭素年代法によると、紀元前1万年前後に始まり、前4世紀頃まで継続して、弥生時代と交代する（広辞苑）」と説明されている時代である。

縄文土器は、時代と地域により形態と文様の違いが大きいが、【資料2-1】に示すように、年代によって出土する土器の形状や文様に特徴がある。

縄文時代の遺跡の調査はモースの大森貝塚の発掘によって始まった（【資料2-2】）。大森貝塚は縄文後期の遺跡であり、品川歴史館の解説によれば、

「その後、1984年と1993年の大森貝塚遺跡庭園整備などの発掘調査が行われ、住居址や土器・装身具・魚や動物の骨などが大量に」見つかった。

この発見の興味深い点は、モースが「横浜から東京に向かう汽車の窓から貝層を発見した（品川歴史館）」ことにあると思われる。大森貝塚の発見は、考古学の端緒となり、身近な場所に研究対象が存在する可能性を示した。

縄文時代の主要遺跡の分布を【資料2-3】に示す。鹿児島県域の遺跡として霧島市の上野原遺跡に注目したい。

上野原遺跡は、昭和61年(1986)に国分市（現・霧島市）において工業団地の造成中に発見されたものである。

文化庁の「国指定文化財等データ」では、「上野原遺跡は「縄文時代初期の遺跡として最大の集落跡である。軽石層によって保護された50棟以上の住居跡群や多数の植物質食料の調理・加工施設、そして追跡が長期にわたる生活痕跡として残され、列島における定住生活の始まりの状況を端的に示している。我が国の縄文文化の幕開きを知る上に欠くことのできない重要な遺跡である。」と説明されている。

鹿児島県域の主要な遺跡については【年表2】及び《地図2》に示す。

【資料2-1】

縄文時代略年表

年代	12000	10000	8000	6000	4000	2000	0
	(単位 年前)						
時代	縄文時代						弥生時代
	草創期		早期	前期	中期	後期	晩期
土器の形状	深鉢土器						浅鉢土器
	注目 ↓ 上野原						注口土器
							壺
文様	隆起線文		貝殻文・竹管文			磨消縄文	

(『詳説日本史研究』山川出版社p.9の資料など、複数の資料を基に作成)

【資料2-2】

貝塚は情報の宝庫

日本の近代考古学の開始を告げたのは、明治時代の初期に東京の大森貝塚を発掘したアメリカ人動物学者モース(Morse,1838-1925)であるといわれる。以来、貝塚の研究は日本の考古学の発展を推し進めてきた。貝塚では、貝の石灰分のおかげで骨や歯など内陸の遺跡では残りにくい自然遺物が残るため、当時の人間生活全般について多くの情報を得ることができる。(中略)貝塚はごみ捨て場といっても、ごみの意味は現在と同じではない。貝塚の中に死者を埋葬することもあり、のちのアイヌの物送りの場と同じように、人々が廃棄という行為を大切にすることが考えられる。

(『詳説日本史研究』山川出版社p.11から引用)

【資料2-3】

縄文時代の主要遺跡の分布

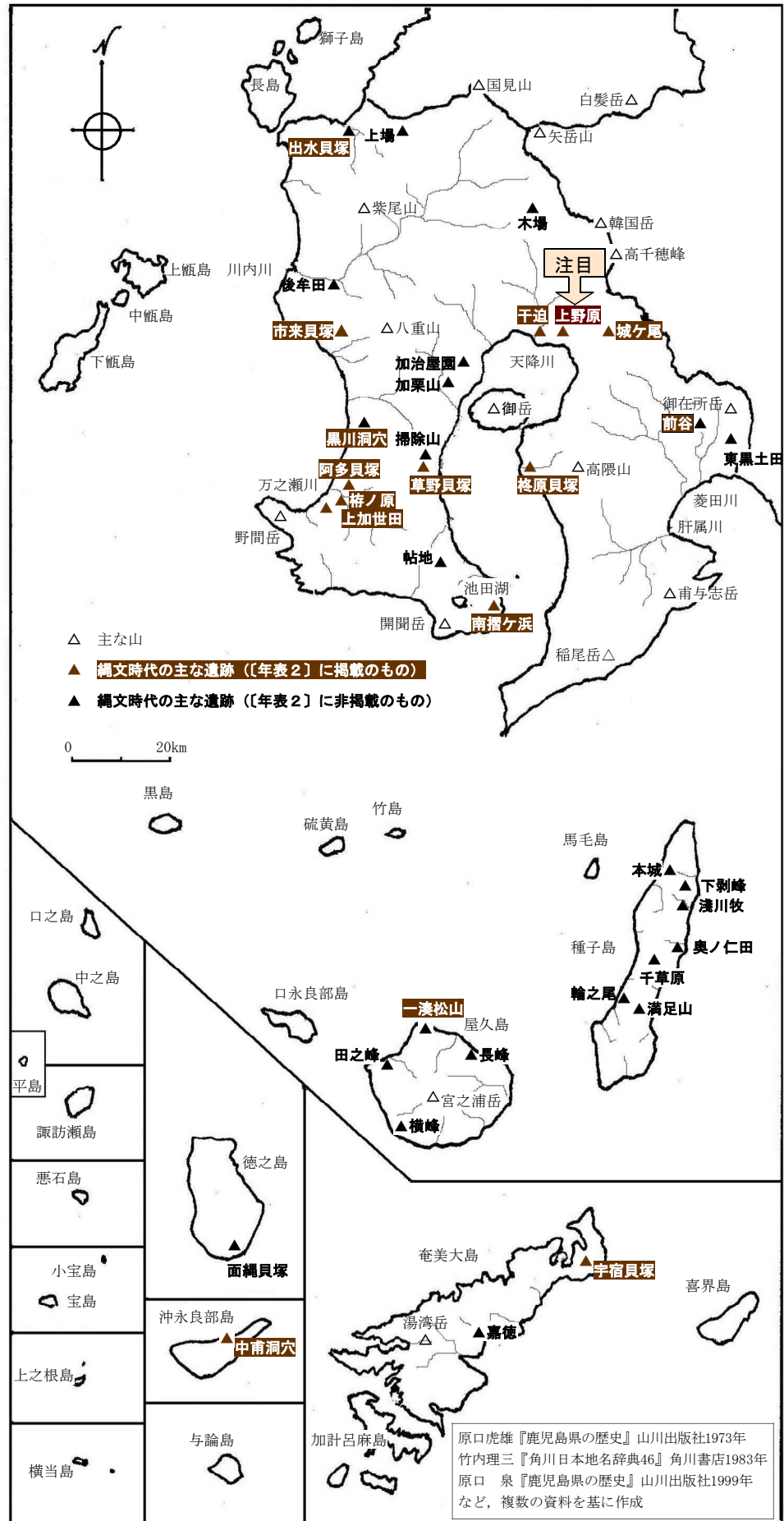


(『詳説日本史研究』山川出版社p.11など、複数の史料を基に作成)

〔年表 2〕

《地図 2》 鹿児島県域における縄文時代の主要な遺跡の分布

年代	主な遺跡
約 13000 年前	縄文時代草創期
約 11500 年前	杵ノ原遺跡 (南さつま市) 桜島が大爆発 (P14火山灰層)
約 10000 年前	縄文時代早期
約 9500 年前	上野原遺跡 (霧島市) 桜島が大爆発 (P13火山灰層)
約 7500 年前	城ヶ尾遺跡 (霧島市) 桜島が大爆発 (P11火山灰層)
約 6400 年前	鬼界カルデラが大爆発 (アカホヤ火山層)
約 6000 年前	縄文時代前期
	阿多貝塚 (南さつま市) 一湊松山遺跡 (屋久島町) 中甫洞穴遺跡 (知名町)
約 5000 年前	縄文時代中期
	出水貝塚 (出水市) 前谷遺跡 (志布志市)
約 4000 年前	縄文時代後期
	草野貝塚 (鹿児島市) 柊原貝塚 (垂水市) 市来貝塚 (いちき串木野市) 千迫遺跡 (姶良市) 宇宿貝塚 (奄美市)
約 3000 年前	縄文時代晩期
	上加世田遺跡 (南さつま市) 黒川洞穴 (日置市) 南摺ヶ浜
約 2500 年前	弥生時代



3 原始「弥生時代」の鹿児島県域

弥生時代は「縄文時代の後、古墳時代の前の時代。その開始の指標を弥生土器の出現とする考え方と、稲作の開始とする考え方がある（広辞苑）」と説明されている時代である。

弥生時代の始まりについては研究が進むにつれてさかのぼる傾向がある。従来紀元前5世紀頃とされていた弥生時代の始まりは、AMS法を用いた年代測定により、稲作の開始時期が紀元前1000年頃であるという研究成果が発表されたため、今後、弥生時代の始まりが従来よりも500年近くさかのぼる可能性があるのである（【資料3-1】）。

これは、【資料3-2】（『詳説日本史研究』山川出版社）に示すように、近年、縄文時代と弥生時代の区分が、製作・使用された土器の違いではなく、経済基盤の違いを基に考えられるようになってきているからである。

弥生時代の主要遺跡の分布を【資料3-3】に示す。鹿児島県域の遺跡では指宿市の橋牟礼川遺跡に注目したい。

橋牟礼川遺跡は【資料3-2】の下線部①の実例である。指宿市考古博物館時遊館C0C0橋牟礼では、このことについて次のように説明している。

『日本近代考古学の父』と評された京都帝国大学の浜田耕作博士は、橋牟礼川遺跡(当時は指宿遺跡)から縄文土器と弥生土器が一緒に拾われたことを知り、大正7、8年に発掘調査を行いました。当時、二つの土器の違いは、使っていた民族が違うからだという説がありましたが、この調査によって、開聞岳の火山灰の下から縄文土器が、上から弥生土器が出土することが明らかになり、2つの土器の違いは、時代差によるものであることが証明されたのです。この発見によって、橋牟礼川遺跡は国指定史跡に指定されました。」

鹿児島県域の主要な遺跡については【年表3】及び《地図3》に示す。

【資料3-1】 弥生時代略年表	
年代	1000 500 紀元 500
(旧)	縄文時代 弥生時代 古墳時代
時代	晩期 早期 前期 中期 後期
(新)	縄文時代 弥生時代 古墳時代
AMS法	晩期 早期 前期 中期 後期
AMS法による九州北部遺跡の年代	黒川 夜臼 I 夜臼 II a 板付 I b 板付 II a 板付 II b 板付 II c 城の越 I 須玖 I 須玖 II 『魏志』倭人伝
史書	『漢書』地理志 『後漢書』東夷伝

(『詳説日本史図録』山川出版社p17など、複数の資料を基に作成)

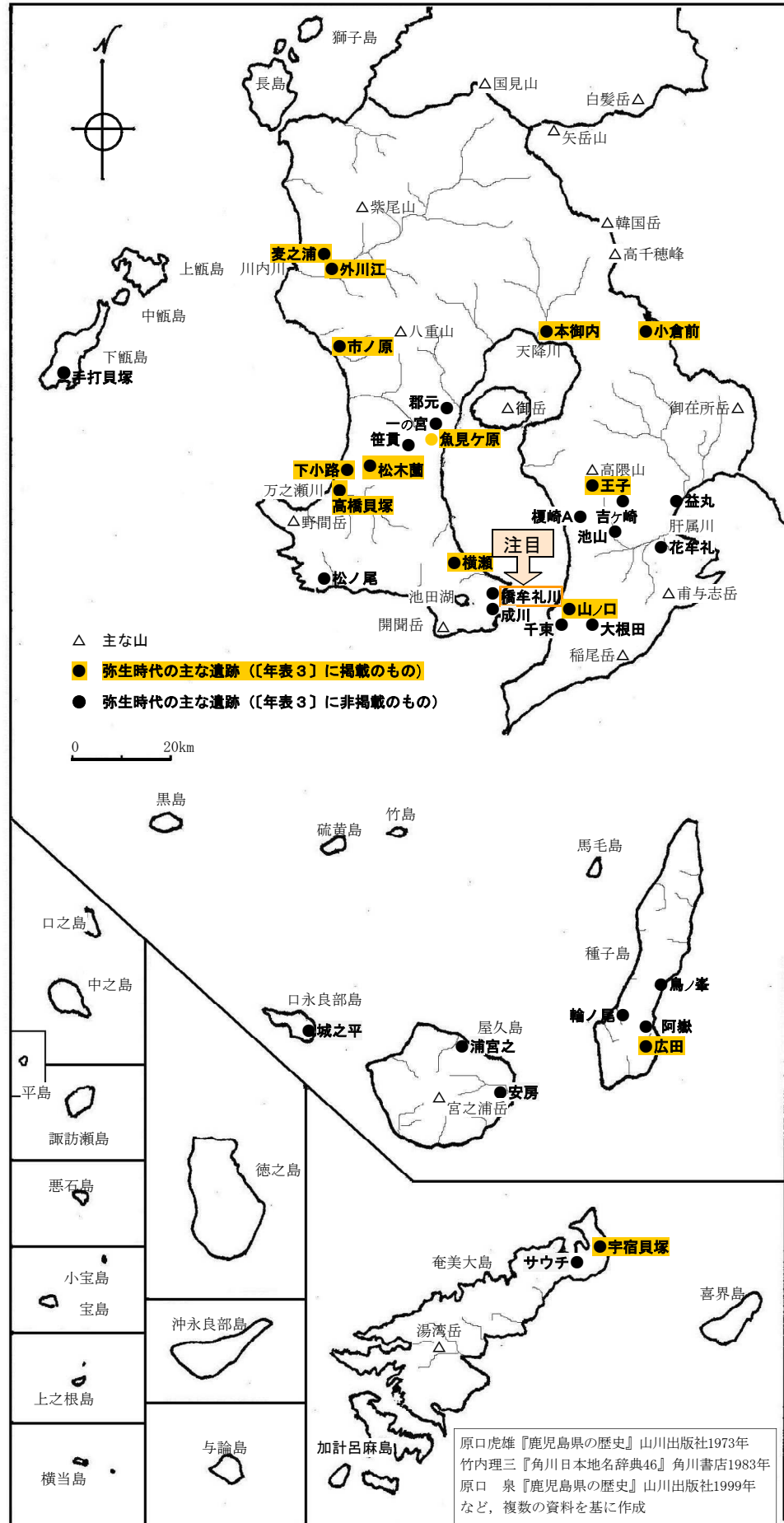
【資料3-2】 弥生土器と弥生時代	
1884（明治17）年、東京本郷の弥生町（現、文京区弥生2丁目）の向ヶ岡貝塚から一つの壺形土器が発見された。薄く堅く、明るい色に焼かれた文様の少ないこの土器は、それまでに発見されていた縄文土器と違う特徴をもつことから、「弥生式土器」と呼ばれた。その後、①弥生土器は縄文土器の上の層から出土したり、青銅器とともに出土することが確かめられ、弥生土器が用いられた時代という意味で、弥生時代が縄文時代の次に設定された。しかし、縄文土器と弥生土器とは製陶技術の点からいうと、轆轤を用いず、野焼きであるなど本質的な変化がなく、明確には区分できない。したがって、時代を分ける指標にはふさわしくないことが主張された。そこで②縄文時代と弥生時代は、<u>採集経済か農耕経済かという経済基盤の違いをもとに区分されるようになり、それぞれの時代の土器を、縄文土器、弥生土器と呼ぶのが一般的になった。</u>（下線は筆者） (『詳説日本史研究』山川出版社pp.18-19から引用)	



〔年表3〕

《地図3》 鹿児島県域における弥生時代の主要な遺跡の分布

年代	主な遺跡
BC 500 年	旧 縄文時代晩期 新 弥生時代早期 ※板付（福岡市） ※葉畑（唐津市） 高橋貝塚 （日置市） 市ノ原遺跡 （日置市）
BC 400 年	小倉前遺跡 （曾於市） 旧 弥生時代前期 新 弥生時代中期
BC 100 年	魚見ヶ原遺跡 （鹿児島市） 下小路遺跡 （南さつま市） 弥生時代中期
紀元	山ノ口遺跡 （錦江町） 王子遺跡 （鹿屋市） 環濠集落化 松木藪遺跡 （南さつま市） 外川江遺跡 麦之浦遺跡 （薩摩川内市） 弥生時代後期
AD 100 年	本御内遺跡 （霧島市） 横瀬遺跡 （指宿市） 宇宿貝塚 （奄美市）
AD 300 年	広田遺跡 （南種子町）



4 原始「古墳時代」の鹿児島県域

古墳時代とは「日本で壮大な古墳の多く造られた時代。弥生時代について、ほぼ3世紀末から7世紀に至る（広辞苑）」と説明されている時代である。

前期の古墳は比較的小規模で、近畿地方や瀬戸内に多く造られた。中期に入ると規模が大きくなり、全国に広がっていった（【資料4-1】）。

埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣と熊本県の江田船山古墳出土の鉄刀に「ワカタケル」と読める銘が刻まれていたことなどから、「おおはつせわかたける大泊瀬幼武（雄略天皇）」の頃の大和政権の勢力は九州から関東に及んでいたと考えられている。この鉄剣・鉄刀銘は【資料4-2】に示すように、製作当時、日本語を漢字で表す試みに挑戦し始めたことを推測できる史料となっている。

古墳時代の主要遺跡の分布を【資料4-3】に示す。鹿児島県域の遺跡では指宿市の弥次ヶ湯古墳に注目したい。

弥次ヶ湯古墳は、南薩地方における貴重な発見である。指宿市考古博物館時遊館COCCO橋牟礼では、このことについて次のように説明している。

「指宿市十町の弥次ヶ湯団地の建て替え事業に伴う平成10年の発掘調査で、古墳が発見されました。この古墳は、円墳で墳丘の直径は約17.5m、周溝の幅は約2mでした。周溝の中からは5～6世紀代の土器が発見されています。墳丘の上半分は、後世の攪乱によって削られていましたが、下半分は7世紀後半の開聞岳の火山灰によって埋没した状態で発見されました。これまで、川内川より南の薩摩半島は古墳の『空白地帯』と考えられており、当時のお墓は土坑墓が主流と考えられていましたが、弥次ヶ湯古墳の発見で、日本の古墳が薩摩半島の南端まで広がることになりました。」

鹿児島県域の主要な遺跡については【年表4】及び《地図4》に示す。

【資料4-1】

古墳の変遷

年 代	201	301	401	501	601	701
	3 世紀	4 世紀	5 世紀	6 世紀	7 世紀	
時 代	弥生 時代	古墳時代				飛鳥時代
		前期	中期	後期		
分 布		近畿・瀬戸内 海沿岸に出現	全国に広 がる	全国に分布		
立 地		丘陵の尾根	平野	山間部や小島にも		
形 状		前方後円墳・ 前方後方墳・ 円墳・方墳	前方後円 墳が巨大 化（周濠）	前方後円墳の規模が 縮小（畿内を除く） 群集墳の増加		
内部の 構造		竪穴式石室	竪穴式石室 横穴式石室	横穴式石室が全国に 普及、装飾古墳		
代表的 な古墳		箸墓古墳	大仙陵古墳 造山古墳	藤ノ木古墳 高松塚古墳		

（『詳説日本史図録』山川出版社p25など、複数の資料を基に作成）

【資料4-2】

日本語表記の始まり

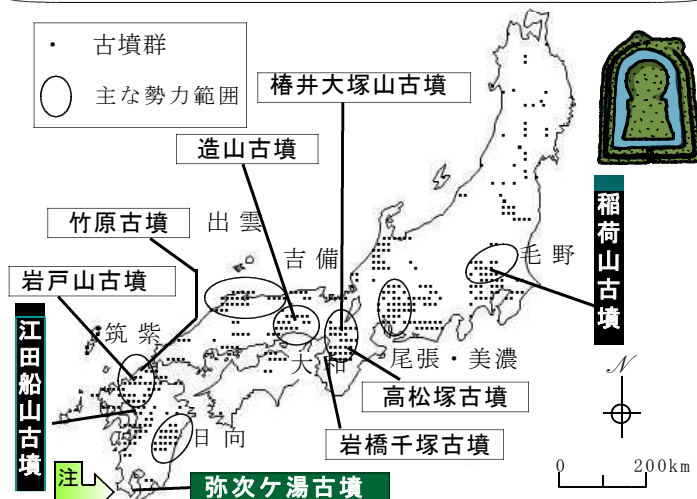
埼玉県稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣は、その銘文から辛亥年（471年）につくられたものと考えられている。鉄剣の表裏に金象眼115文字を記したもので、同時代の文献資料のまったくない5世紀にあつては、ほぼ同時期の熊本県江田船山古墳出土の鉄刀銘とともに貴重な同時代資料である。（中略）

ただここにはワケ、オオヒコ、ワカタケルなどの人名やシキといった地名が、のちの万葉仮名と同じように漢字の音をかりて表記されていることが注目される。自ら文字を作り出さなかった倭人は、こうして日本語を漢字によって表記する術を獲得していった。ただしこの時期にこうした文章をつくり、また書いたのが渡来人であったことは、江田船山古墳出土の銀象眼銘鉄剣の銘文に「書く者は張安也」と記されていることから明らかである。

（『詳説日本史研究』山川出版社pp37-38から引用）

【資料4-3】

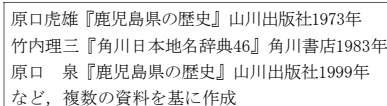
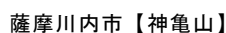
古墳時代の主要遺跡の分布



（『詳説日本史図録』山川出版社p26など、複数の資料等を基に作成）

《地図4》 鹿児島県域における古墳時代の主要な遺跡の分布

※ 端 陵古墳と中 陵古墳
は、神代三山陵の一つである可愛山陵（天孫【邇邇藝命】の陵墓）及び新田神社（薩摩一ノ宮）と隣接しており、山陵【神龜山】全体が古墳の様相を示している。



5 古代「飛鳥時代～奈良時代～平安時代」の鹿児島県域

古代とは「世界史的には、原始時代のあとをうけて、文明と階級とが成立しながら、しかも封建社会には進んでいない段階。主として奴隷制を土台とする社会をいう。日本史では一般に奈良・平安時代をさし、大和朝廷時代を含めてもいう（広辞苑）」とされている時代である。この時期は大和朝廷の勢力拡大に伴い、天皇を中心とする国家体制を整えようとした時期であると捉えられられ、また、実質的な政治権力が天皇から他の勢力に移っていった時代であるとも言える（【資料5-1】）。

飛鳥時代、鹿児島県域は大和政権の勢力外にあった。南九州と南島は、天武・持統朝（8世紀初頭）に大和政権に服属したのであり、それ以前は、いわゆる独立国家（村落）であったことを理解しておきたい。

なお、【資料5-2】に示すように、文武天皇の頃（7世紀末）、種子島・屋久島・奄美大島・徳之島の人が朝貢している記録があるので、大和政権がこの頃には鹿児島県域の島々について、認識していたことは分かっている。

奈良時代初めの和銅6年(713)には、日向国の内、4郡を割いて大隅国が設置され、鹿児島県域も中央政権の国・郡・里制に組み込まれることになった（【資料5-3】）。

従前この地方を治めていたのは大住直である。大隅という名の意味は、中央から見て「大いなる隅っこ」を表していると考えられている。

薩摩国はこれに先立つこと10年ほど前に設置されたと考えられている。「サツマ」は、「サ」と「ツマ」に分けられ、「サ」は「狭い」ことを意味し、「ツマ」は「先端」を意味する（サツマ）という意味があつたのかも知れない。

のちに好字の「薩摩」が用いられるようになった。

【資料 5-1】		古代略年表								
年 代	601	701	801	901	1001	1101	1201			
時 代	593	飛鳥	710奈良	794	858 887	平安	1016	1086	1167	1185
主 な で き ご と	聖徳太子が摂政になる	645 大化の改新	672 元明天皇が平城京遷都 710 大寶律令制定	741 桓武天皇が平安京遷都 769 宇佐八幡宮神託事件 794 国分寺建立の詔	842 藤原基経が関白就任 858 藤原良房が摂政就任	901 承平の乱 939 天慶の乱 901 昌泰の変	藤原道長が摂政就任	白河上皇が院政開始	1167 平清盛が太政大臣に就任 1185 保元の乱 1189 平治の乱	1177 源頼朝が全国に守護・地頭を設置 鹿ヶ谷の陰謀

（『詳説日本史図録』山川出版社pp. 328-334の年表などを基に作成）

【資料5-2】

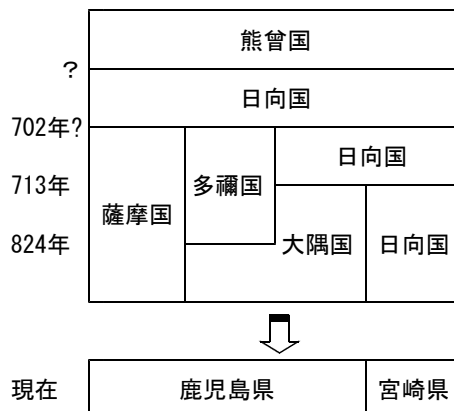
南島人の朝貢

『史料による日本の歩み古代編』（二六二頁）
（続日本紀卷一、国史大系所収）

（文武天皇二年）夏四月壬寅。
遣_二務_レ氏武文忌寸博士等八人于南嶋_一。
覓_レ国。因給_二戎器_一。
（六九九年）
三年秋七月辛未。多櫛・夜久・
菟美・度感等人、從_二朝宰_一來貢_二方物_一。
授_レ位賜_レ物各有_レ差。其度感島通_二中国_一。
於是始矣。

【資料5-3】

大隅国の分置



（和銅六年）夏四月乙未。（中略）
割_二日向国肝坏_一・贈於_二大隅_一・
始羅四郡_一、始置_二大隅国_一。
『史料による日本の歩み古代編』（二六二頁）
（続日本紀卷六、国史大系所収）

『古事記』に、その編纂直前の時期に大和朝廷に服属することになった隼人を神話的にも服属させた記述がある。天皇家の祖先神である火遠命（山幸彦）に、兄の火照命（海幸彦：隼人族の祖先神）が服従するシーンである（【資料5-7】）。

隼人が大和政権の支配下に入ると、宮廷の護衛や儀式の為に上京し、隼人の盾を持ち、犬の遠吠えをして宮門を守ったり、溺れる仕草で踊ったりするようになった。「海幸・山幸の物語」は、このことの起源を説明したものとされている。服従者のそのような姿は大変侮蔑的なものであり、大和地方の豪族に支配者である天皇の権威を見せつける役割を担ったものと思われる。

さて、聖武天皇の大仏建立の詔により全国に国分寺が建立されたが、奈良時代は薩摩・大隅も中央政権下にあったため、両国にも国分寺が建設された。

大隅国分寺は霧島市立国分小学校近くに存在した。現在、その跡地は公園になっている（【資料5-8】）。大隅国府はこの地の西にあたる霧島市国分府中町の向花小学校の近くにあったと考えられている。国分寺跡に対して国府跡は、正確に治定することが難しく、昭和53年に建てられた石碑には、「府中のこの一帯が国府の跡であると伝えられている。」と記されている。

一方、薩摩国府の発掘調査は川内高校の平田信芳教諭（当時）と、郷土史研究クラブの生徒たちによって始められ、昭和39年（1964）に関連する遺跡が発見された。薩摩国府は薩摩川内市立可愛小学校近くに推定されており、薩摩国分寺跡地は、現在、史跡公園となっている（【資料5-9】）。

鹿児島県域の古代の主要な交通路は、《地図5-1》に示すように、薩摩国府（現在の薩摩川内市）と大隅国府（現在の霧島市）を結ぶ形で東西に延びており、それぞれ肥後国・日向国へ向かうように作られていた。

【資料5-7】

火照命（海幸彦）の服従

攻めむとする時は、鹽盈珠を出して溺らし、それ愁ひ請せば、鹽乾珠を出して救ひ、かく惚まし苦しめたまひし時に、稽首白しく、「僕は今より以後は、汝命の晝夜の守護人となりて仕へ奉らむ。」とまをしき。故、今に至るまで、その溺れし時の種々の態、絶えず仕え奉るなり。

『古事記』 倉野憲司校注岩波文庫（八六頁）

將攻之時、出鹽盈珠而例溺、其愁請者、出鹽乾珠而救、如此令惚苦之時、稽首白、「僕者自今以後、爲汝命之晝夜守護人而仕奉。故至今、其溺時之種種態、不絶仕奉也。」

『古事記』 倉野憲司校注岩波文庫（二七一頁）

【資料5-8】

大隅国分寺跡



大隅国府跡石碑



《霧島市 大隅国分寺跡公園》

【資料5-9】

薩摩国分寺跡

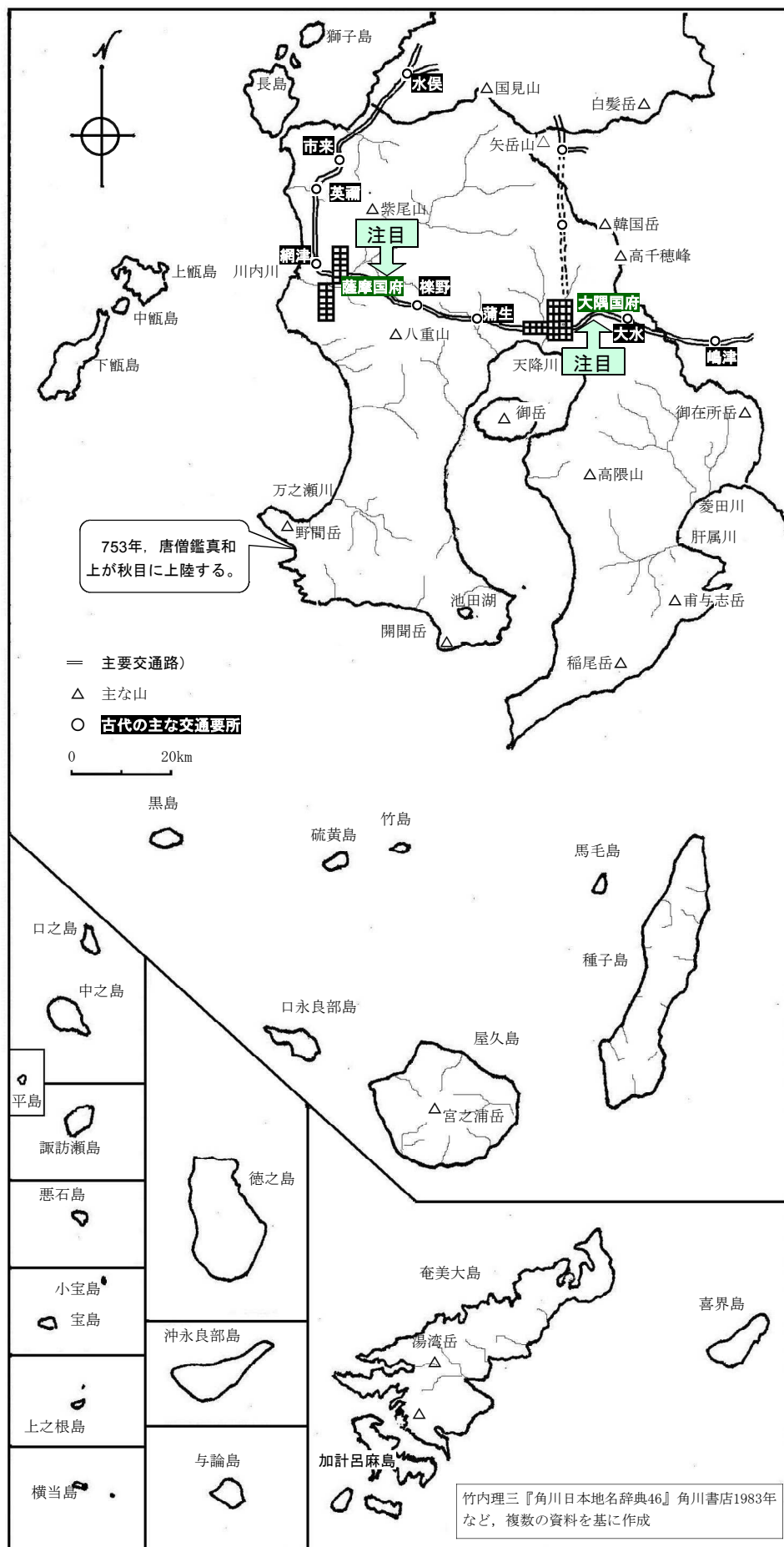


薩摩国分寺創建時伽藍想定図



《薩摩川内市 薩摩国分寺跡史跡公園》

年代	主なできごと
	飛鳥時代
653	遣唐使船が「薩麻之曲・竹嶋之間」で沈没する。
681	多禰島人が飛鳥寺で饗応される。
699	多櫛・夜久・菴美・度感等人が朝貢する。
702	薩摩と多櫛の反乱が鎮圧される。
709	薩摩隼人らが朝貢する。
	奈良時代
710	日向国は采女の、薩摩国は舎人の献上を命じられる。
713	日向国の肝坏・曾於・大隅・始羅の4郡を割いて、大隅国が設置される。
723	隼人が朝貢する。
733	多櫛島の千人余に姓を与える。
740	藤原広嗣の乱に隼人が動員される。
753	鑑真和上が秋目に上陸する。
755	菱刈郡が設置される。
788	大隅国曾於郡の曾乃峯が噴火。
	平安時代
805	朝貢した隼人の風俗歌舞が停止される。
824	多櫛島が大隅国に併合される。
869	和気清麻呂が別部穢麻呂と改名され、大隅国へ流罪となる（宇佐八幡宮神託事件）。



〔年表 5-2〕

年代	主なできごと
	平安時代
858	藤原良房が摂政に就任
873	甕島郡に渤海人が漂着する。
874	開聞岳が噴火し、南薩地方が被害を受ける。
885	
901	菅原道真が大宰府に左遷される(昌泰の憂)。
935	承平の乱(平将門の乱)
939	天慶の乱(藤原の純友の乱)
997	奄美人が薩摩国などを襲撃。太宰府が奄美人40余人を討伐する。
998	大宰府が貴賀島に奄美人追捕を命じる。
999	大宰府が奄美人追討のことを朝廷に言上する。
1016	藤原道長が摂政に就任
1024頃	大宰大監平季基が、島津荘を関白藤原頼通に寄進する。
1025	大隅掾為頼が右大臣藤原実資に絹や牛皮などを進上する。
1027	藤原実資が大隅為頼に馬一匹を与える。
1029	薩摩守巨勢文任が藤原実資に絹や皮などを進上する。
1086	白河上皇が院政を開始
1138	阿多郡司平忠景が私領を祈祷料として観音寺に寄進する。
1156	保元の乱
1159	平治の乱
1167	平清盛が太政大臣に就任
1177	鹿ヶ谷の陰謀が発覚し、俊寛・平康頼・藤原成経が鬼界島(硫黄島)に流される。
1180	源頼政が挙兵する(治承・寿永の乱)
1185	壇の浦の戦いで平氏が滅亡する。源頼朝が惟宗忠久を島津荘下司に補任する。

平安時代に入ると、中央政権の版図拡大は東北日本へと移り、南九州は平定すべき特別な地域ではなくなっていった。また、かつて上京した隼人の子孫は畿内隼人として永住したため「隼人」の名は残ったが、延暦24年(805)、隼人の風俗歌舞が停止され、本来の隼人はその存在感が薄まっていった。薩摩国・大隅国も中央政府による委任を受けた国司による支配が強化され、日本国化していったのである。

しかし、社会情勢としては荘園の増加及び各種の反乱や中央の権力闘争に翻弄されたのか、両国の統治は順当にはいかなかったようである。この時代(10世紀後半)の大隅の国司が郡司に対して支配を強化しようとしたことを示す史料が、「今昔物語」や「宇治拾遺物語」に残っている。

【資料5-10】は「宇治拾遺物語」にある「歌詠みて罪を許さるる事」である。国司が放漫な政務を行っていた郡司(名は不明)を懲らしめようと呼び出すが、その郡司が老人であったので憐れみ、何とか咎めずに済ますことはできないかと思案して、和歌を詠ませて許したという話である。

ここでの罪とは、徴税及び納税を怠ったことと考えられるが、郡司の税の徴収権限は既に弱くなっていたのではないかと考えられている。この国司(大隅守某)は櫻島忠信であるとされており、一説によると彼は「桜島」の島名の由来となっている人物である。「年を経て頭の雪は積もれどもしもと見るにぞ身は冷えにける」(年をとり頭は雪が積もったような白髪になってしまいましたが、鞭の怖さと霜の寒さで体が凍えてしまいます:筆者訳)の歌は、権限が無いにも関わらず職務を遂行せざるを得ない身である郡司が、国司の懲罰に震えながら詠んだ哀しい歌であるように思える。老郡司を憐れんで釈放した櫻島忠信が、辺境国の郡司の歌の出来映えに感動したのも確かなようである。当時の鹿児島県の文化レベルを示すエピソードとして取り上げたい。

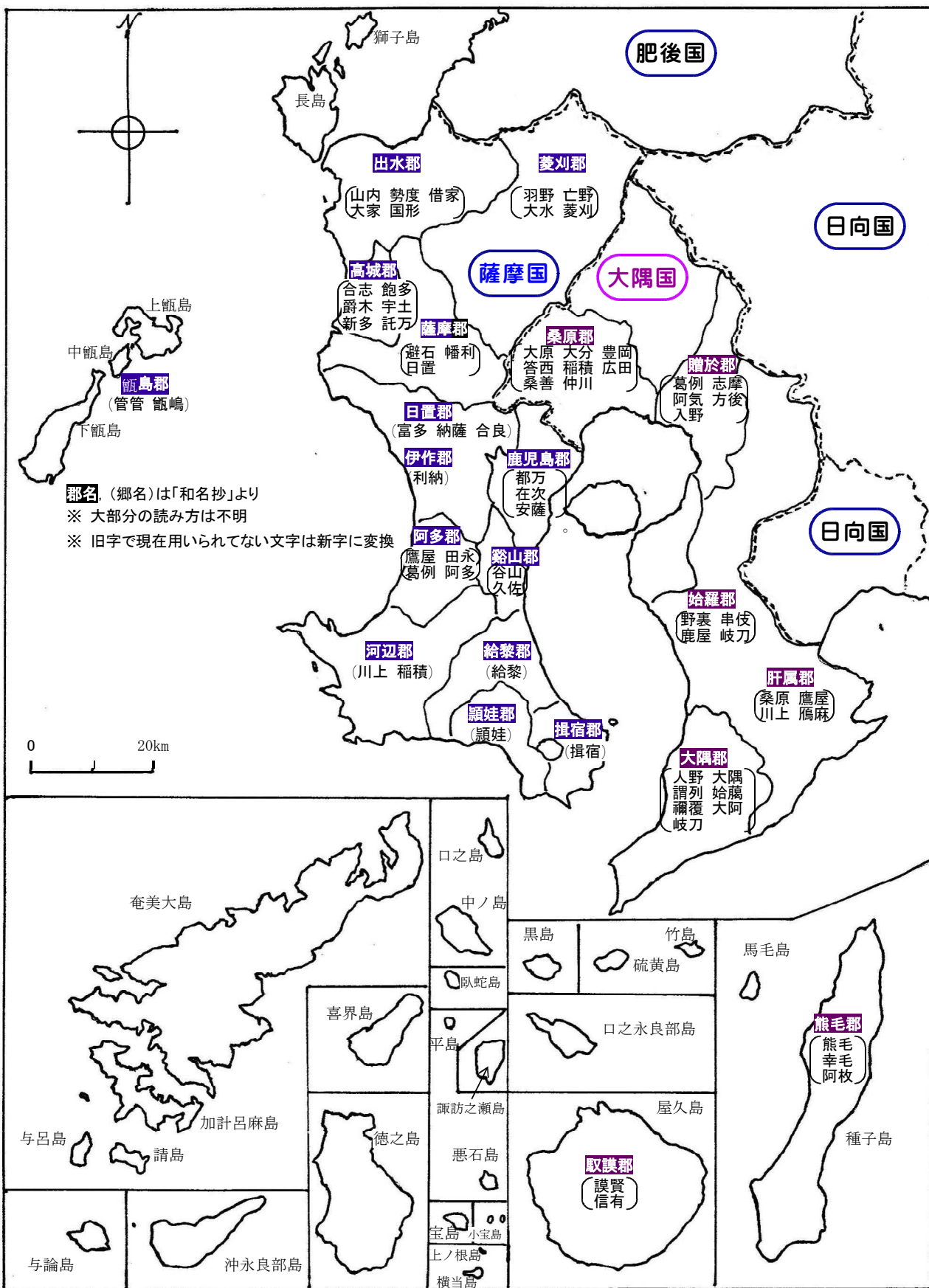
【資料5-10】「宇治拾遺物語」に記された大隅守の情け

今は昔、大隅守なる人、国の政をしたため行ひ給ふおひだ、郡司のしどけなかりせば、「召しにやりにて戒めん」といひて、先々か様にしどけなき事ありけるには、罪に任せて重く軽く戒むる事ありければ、一度にあらず、たびたびしどけなき事あれば、重く戒めんとて召すなりけり。「ここに召して率いて参りたり」と、人の申しければ、先々するやうに、し伏せて、尻、頭ののぼりみたる人、首を設けて、打つべき人設けて、先に人二人引き張りて出で来たるを見れば、頭は黒髪も混じらず、いと白く、年老いたり。見るに、打ぜん事いとほしく覚えれば、何事につけてかこれを許さんと思ふに、事つくべき事なし。過ちども片はしより問ふに、ただ老を富家にていらをへる。いかにしてこれを許さんと思ひて、「おのれはいみじき盗人かな。歌は詠みてんや」といへば、「はかばかしからず候へども、詠み候ひなん」と申しければ、「さらば仕れ」といはれて、程もなく、わななき声にて打ち出す。

年を経て頭の雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにける
といひければ、いみじうおはれがりて、感じて許しけり。
人はいかにも情はあるべし。

小林保治氏・増古和子氏校注・訳『宇治拾遺物語』から引用

《地図 5-2》 鹿児島県域における古代の郡・郷



※ 「郡」はおよその位置であり、また、当時の郡内の「郷」がどこを指すのかもはっきりしていない（島名は現在のもの）。

島津氏はどのようにして鹿児島県全域を治めることになったのだろうか。このことについて、【資料6-4】と【資料6-5】に沿ってまとめてみたい。

初代の島津（惟宗）忠久は、『島津正統系図』によれば源頼朝の落胤であり（【資料6-6】）、頼朝によって薩摩国と大隅国の守護職に補任された。その後、比企能員の変に連座したため大隅の守護職を取り上げられた。3代の久経が元寇を期に薩摩国出水郡に下向し、初めて在地の守護職となった。

5代の貞久は後醍醐天皇による鎌倉幕府倒幕運動に参加し武功を挙げたため、大隅国と日向国の守護職に補任され、島津氏は薩隅日三州の守護となった。しかし、貞久が三男の師久に薩摩国、四男の氏久に大隅国の守護職を継承させたため、島津宗家は大きく二つに分かれた。上総介であった6代の師久家を総州家、陸奥守であった同じく6代の氏久家を奥州家と呼ぶ。

総州家内で、7代の伊久と嫡子守久の内紛が起こり、これを奥州家7代の元久が調停したため、恩義を感じた伊久が薩摩国守護職を元久に譲った。

これにより守護職は奥州家が独占することになったが、元久に嫡子がなかったため、伊集院頼久が子を奥州家当主にすえようとした。これを阻止するために元久の弟の久豊が8代当主に就き、伊集院氏と対立した。総州家が伊集院氏側に付き、内乱（伊集院頼久の乱）となったが、奥州家の久豊がこれを鎮圧し、総州家も滅ぼした。これによって奥州家が島津宗家として薩摩・大隅両国を統治することになった。

応仁の乱後、島津宗家は徐々に弱体化した。14代の勝久の頃には、伊作家の島津忠良と薩州家の島津実久が台頭し争った結果、忠良の嫡男貴久が、宗家15代を嗣ぎ薩摩・大隅を制圧した。

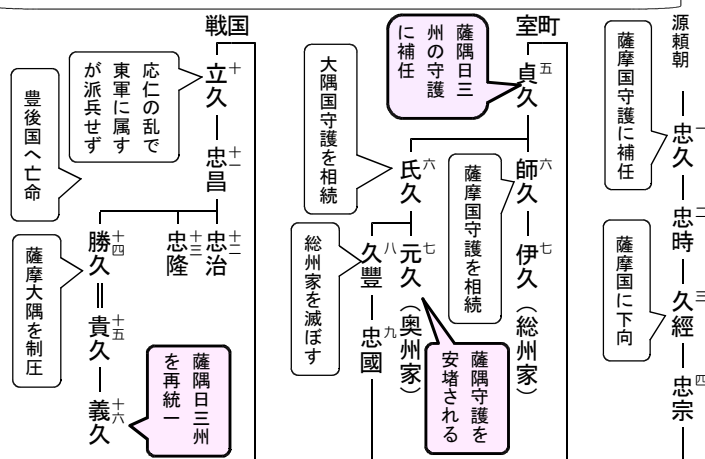
そして、16代の義久が日向の伊東氏を破り、三州を再統一したのである。

【資料6-4】 中世略年表（島津氏関係）

年 代	1201				1301				1401				1501				1601															
時 代	1185 鎌倉				1334 ₃₆ 1378 ₉₂ 南北朝 室町				1467 戦国				1573																			
島津家 当 主	① 忠久	② 忠時	③ 久經	④ 忠宗	⑤ 貞久	⑥ 歟 臥	⑦ 臥 忖	⑧ 久豊	⑨ 忠國	⑩ 立久	⑪ 忠昌	⑫ 忠治	⑬ 忠隆	⑭ 勝久	⑮ 貴久	⑯ 義久																
主 な で き ご と	薩摩大隅の守護に補任		承久の乱で武功		元寇を機に下向		薩摩国で没（島津氏初）		鎌倉幕府倒幕運動に参加		薩摩・大隅守護職を分割		総州家と奥州家の対立		伊集院頼久の乱を鎮圧		守護大名として確立		応仁の乱で東軍に属す		桂庵玄樹を招聘（薩南学派）		早世		早世		伊作家と薩州家が台頭		薩州家を破り薩摩大隅を制圧		伊東氏を破り三州を再統一	

（原口泉ら『鹿児島県の歴史』山川出版社 年表pp.9-11などを基に作成）

【資料6-5】 島津家略系図（中世）



（『島津氏正統系図』から作成。漢数字は当主としての代数）

【資料6-6】 島津氏の出自

（前略）
島津氏は、名字は島津を称し、氏としては鎌倉期に惟宗・藤原・室町期以後は藤原・源を名乗った。源の氏は、島津氏が対外貿易を有利に進めるために、室町幕府將軍足利氏の氏を名乗ったのである。江戸初期になると、徳川氏に対抗するために源の氏のみを称し、そのよりどころとなったのが、十五世紀以降発達した島津忠久の源頼朝落胤説である。江戸時代薩摩藩の公式見解は、島津氏清和源氏源頼朝末裔説であった。幕末尊皇攘夷風潮のなかで、島津氏の以仁王後胤説も出現したが、根付かなかった。
（原口泉ら『鹿児島県の歴史』山川出版社 一三頁から引用）

忠久
治承三年己亥誕生
母、丹後局也、雖為頼家・實朝之兄、腹也、補家督、以生他
（『島津氏正統系図』十一頁から引用）

鎌倉時代初期、鹿児島県域各地には守護職島津氏のほか、鮫島氏、千葉氏などが地頭職に補任されていた。川薩地方にあった高城郡・東郷別府・祁答院・入来院などの惣地頭千葉秀胤^{ひでたね}一族が宝治合戦（宝治元年(1247)）の余波で滅亡すると、翌年、合戦に功のあった渋谷光重の5人の子が、この地の地頭に補任された。渋谷兄弟は領地の名を名字とし、東郷氏・高城氏・祁答院氏・入来院氏・鶴田氏の祖となった。いわゆる渋谷五族である。

この中で、入来院氏に伝わる『入来文書』は、大変貴重な資料である。戦前、朝河貫一博士によって英訳された『The Documents of Iriki』は日本中世封建時代が広く欧米に知られるきっかけとなったのである（【資料6-7】）。

入来院氏などの渋谷五族は、当初、島津氏と対立していたが、争いに敗れ、後に降伏することになる。

このように、中世の武士団が互いに勢力争いをするようになると、戦いの拠点となる城を築く必要が出てきた。次頁の《地図6-1》は中世の城址の分布図である。この頃になると、離島にも城が築かれ始めている。奄美群島に築かれた城は琉球系の^{グスク}城と呼ばれるものが多い。

南北朝・室町・戦国時代は、鹿児島県域においても戦乱が多発した時代であるため、中世の城址は鹿児島県全域に分布している。現在は公園になっている場所もあれば、既に山林となっている場所もあるが、身近な城址を調べることが郷土を知るきっかけになると思われる。例えば鹿児島市清水町の東福寺城跡の説明板（【資料6-8】、【資料6-9】）には北朝方の島津貞久が暦応4年(1341)、南朝方の鹿児島郡司矢上一族を滅ぼしたと書かれており、鹿児島城下は東福寺城から南へ広がっていったことが説明されている。現在、東福寺城跡は、多賀山公園に隣接している。

【資料6-7】 「入来文書」と朝河貫一博士

「入来文書」は、薩摩国入来院地頭入来院氏および一族・被官（家臣）の家に伝わった文書の総称である。入来院氏は渋谷一族で、鎌倉中期に入来院地頭に補任され下向し、入来院の地名を名字とした。

「入来文書」は、時期的には平安後期から江戸前期および、入来院の歴史を約500年間追跡することができる。また、「入来文書」は、量的にもまとまって残存し、日本中世社会の諸問題を分析するうえで貴重な資料である。

朝河貫一は、戊辰戦争時、佐幕派の二本松藩出身である。

（中略）

アメリカに帰ったのち、朝河は「入来文書」出版にむけて堅実に仕事を進め、大正一四年『入来文書』日本文原稿が日本国内で出版され、昭和四(1929)年『The Documents of Iriki』も完成し、日英両文合冊の形でエール大学とオックスフォード大学の出版界から刊行された。欧米学会できわめて高く評価され、マルクルブロック『封建社会』やルース・ベネディクト『菊と刀』などで引用され、その後欧米の学者の日本封建制研究のための中核的資料となった。

（原口泉ら『鹿児島県の歴史』山川出版社一七頁から引用）

【資料6-8】 三州統治の足掛かり

—南北朝時代、島津氏は鹿児島に進出した—

中世の山城「東福寺城」が時代の脚光を浴びたのは南北朝(1336～1392)のころです。鎌倉時代に源頼朝の命を受け、薩摩の地頭職にあった島津氏は、当初出水に居を構えていましたが、南北朝の対立が全国に広がり、薩摩でも二手に分かれて激しい騒乱をくり返すようになると、機に乗じて当地への侵攻を企てました。

北朝（武家方）に味方する島津家第5第貞久は激戦の末、1341年（暦応4）、東福寺城にこもる鹿児島郡司矢上一族を責め落としましたのです。

貞久とその子第6第氏久は、およそ40年間にわたって、この東福寺城を根城に大隅地方まで勢力をのばしました。

島津氏が鹿児島に本城を置いたのは、この東福寺城からで、その後清水城、内城、鶴丸城が築かれ、城下が南へのびていった様子がこの地から一望できます。

（鹿児島市）

【資料6-9】 三州統治の足掛かり（英語版）

THE FIRST SHIMADZU STRONGHOLD

...Shimadzu comes to Kagoshima...

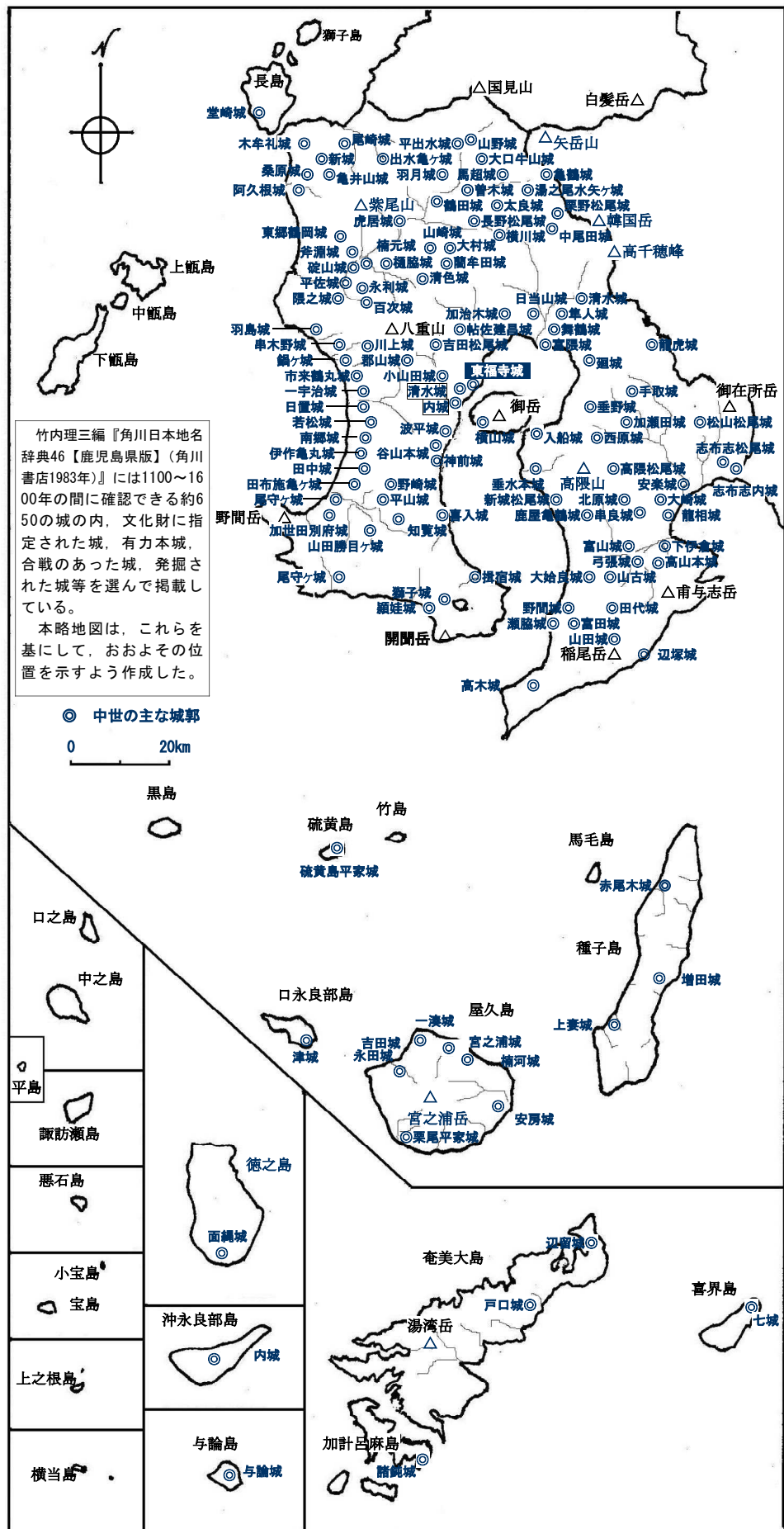
Tofukuji Castle dates from the period of civil war between the northern and southern imperial dynasties(1336-1392). On the orders of the kamakura Shogun,Minamoto Yoritomo,Shimadzu Tadahisa,had come to Izumi to take personal control of his domains in southern Kyushu. Shimadzu Sadahisa,the 5th Lord,left Izumi and 1341 defeated the Yagami clan at Tohukuji Castle. Sadahisa and his son,Ujihisa thereafter settled in Tofukuji Castle, from where they governed as far as Osumi. From Tohukuji,the Shimadzu family later moved south to Shimadzu.Uchijou,and finally Tsurumaru Casle. All these can be seen from this point.

（鹿児島市）

〔年表 6〕

《地図 6-1》 鹿児島県域における中世の城郭の分布

年代	主なできごと
1185	源頼朝が惟宗に補任する。
1197	惟宗（島津）が薩摩に補任される。
1221	承久の乱で満家幸の島加討院光平羽上る（乱を受ける）。
1247	宝治合戦の余波で滅亡する。
1248	高城郡・東郷別入・院惣心兄弟が合戦のあつた城、発掘された城等を選んで掲載している。
1333	鎌倉幕府の滅亡
1334	建武の新政
1336	南北朝の分立
1341	北朝方の島津貞久が南朝方の矢上氏を滅ぼす。
1363	島津貞久が薩摩津久に譲与する。
1382	島津伊久が薩摩津久に譲与される。
1392	南北朝の合体
1404	島津元久が大隅日向両国守護を安堵される。
1409	島津元久が薩摩国守護に補任される。
1543	ポルトガル人が種子島に到来して鉄砲を伝える。
1549	F=ザビエルが鹿児島に上陸し、キリスト教を伝える。
1550	島津貴久が鹿児島に入城する。
1569	島津義久が北薩の襲撃を降伏させる。
1570	島津義久が東郷氏を降伏させる。
1573	室町幕府の滅亡



中世には、日本史的に重要なことが鹿児島県域で起こっている。第1が鉄砲伝来であり、第2がキリスト教伝来である。

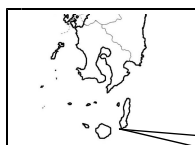
天文12年(1543)、明人倭寇の王直の船に乗っていたアントニオ＝ダ＝モッタら3人のポルトガル人が、種子島に上陸した(【資料6-10】)。彼らは火縄銃(マラッカ銃)を持っており、これを見た島主種子島時堯は職人の八板金兵衛に鉄砲製作を命じた。金兵衛は鉄砲の模造にほぼ成功したが、底部閉塞法が分からず、娘の若狭をポルトガル人に与え、これを習得したとも言われている。原口虎雄氏の『鹿児島県の歴史』では「種子島氏の功績はこの鉄砲の伝授研究と、それを惜しげもなく国内に伝えたこと(p126)」と解説している。

その後、多くのヨーロッパ人が日本を目指すようになり、来日していたポルトガル人のジョルジュ＝アルバレスが山川からマラッカに戻る際、鹿児島の青年ヤジロウを連れ帰り、フランシスコ＝ザビエルに紹介した。天文18年(1549)、ザビエルはヤジロウとともに鹿児島に上陸し、キリスト教を布教した。ザビエル上陸記念碑(【資料6-11】)には、「この国の人々は礼儀を重んじ、一般に善良で悪い心は持っていない。何よりも名誉を重んずるが、一般に貧しい。しかし、それを恥とは思っていない。」と、ザビエルが感想を述べたことが記されている(出典『異国叢書耶蘇会士日本通信』上巻、村上直次郎訳)。これは、ザビエルが鹿児島滞在中の感想であり、この国の人とは当時の鹿児島の人々を指している。

このような時代であった中世の鹿児島県域について当時の郡や郷をおおまかに分類し、【資料6-12】、《地図6-2》に示す。島津荘以外に、正八幡宮領(鹿児島神宮の領地)が多かったことがわかる。

【資料6-10】

鉄砲の伝来



《鉄砲伝来紀功碑》
(南種子町 門倉岬)

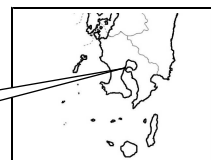
1543年、明人倭寇王直の船に同乗したポルトガル人が種子島門倉岬に到来して鉄砲を伝える。

【資料6-11】

キリスト教の伝来



《ザビエル上陸記念碑》
(鹿児島市祇園之洲町)



1549年、スペインイエズス会の宣教師F＝ザビエルが鹿児島に上陸し、キリスト教を伝える。

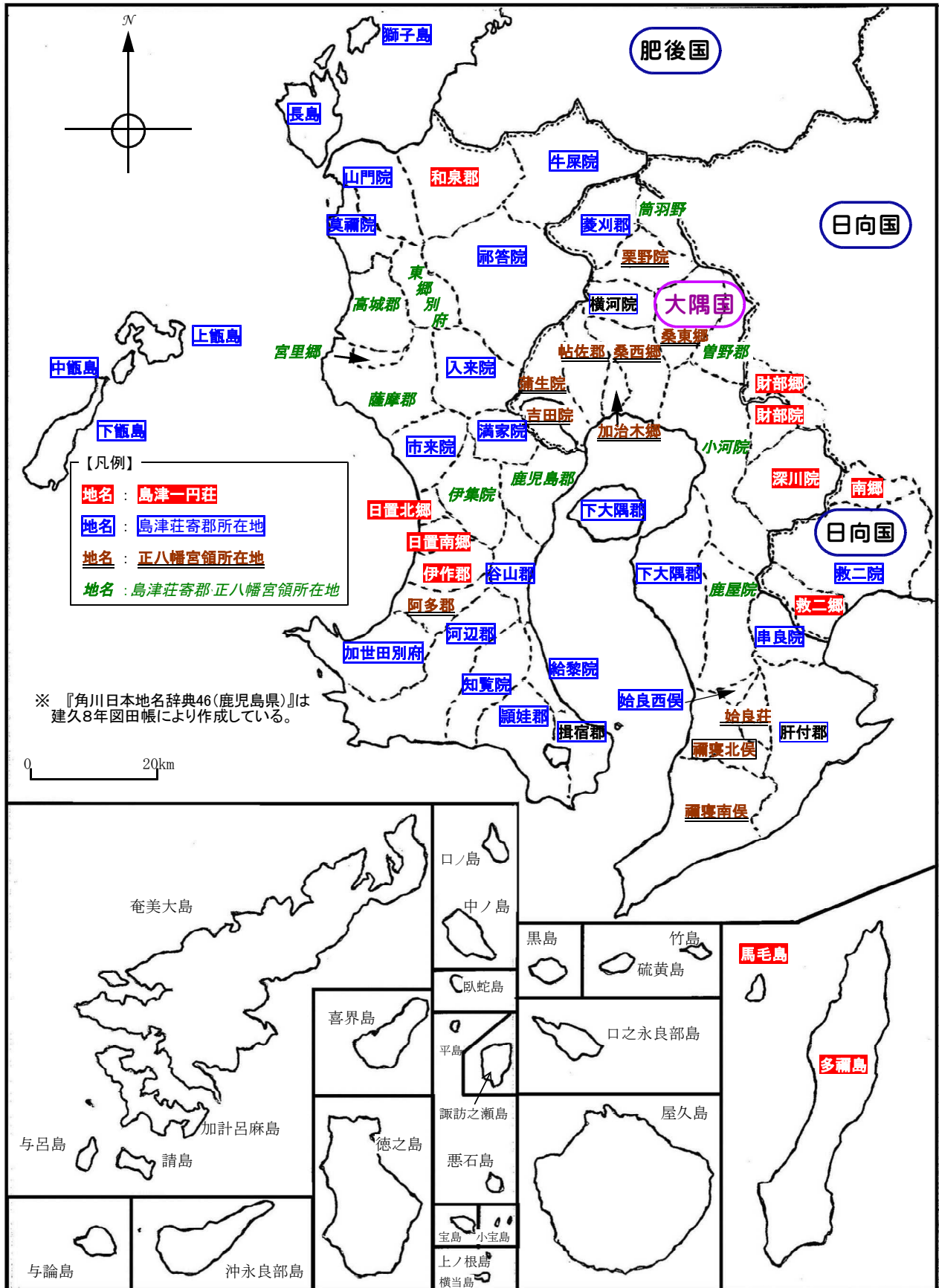
【資料6-12】

中世における鹿児島県域の主な郡郷

	薩摩国	大隅国	日向国
島津一円荘 この地域全域が島津荘になっている場所	伊作郡 出水郡 日置北郷等	財部院 深川院 多禰島等	財部郷 南郷 救仁郷等
島津荘寄郡所在地 島津荘領主と国司がおおむね二分している場所	入来院 満家院 川辺郡等	菱刈郡 横川院 下大隅郡等	救仁院等
正八幡宮領所在地 鹿児島神宮(大隅一宮)の所領があった場所	阿多郡	桑東郷 桑西郷 帖佐郡等	
島津荘寄郡・正八幡宮領所在地 島津荘寄郡所在地 と 正八幡宮領所在地 が混在地	高城郡 鹿児島郡 伊集院等	曾野郡 小河院 鹿屋院等	

(『鹿児島県の歴史』及び『角川日本地名辞典46』から鹿児島県域関係を抜粋して作成)

《地図 6-2》 鹿児島県域における中世の郷・荘



※ この略地図は、竹内理三氏編集の『角川日本地名辞典46【鹿児島県版】(角川書店1983年)』に掲載されている資料など、複数の資料を基に作成したものである。

※ 「郡」「郷」「院」等はおよその位置である(島名は現在のもの)。

7 近世「安土桃山～江戸時代」の鹿児島県域

近世とは「古代・中世のあとに続く時期。広義には近代と同義で、狭義には近代と区別して、それ以前の一時期を指すことが多い。一般にヨーロッパ史ではルネサンスから絶対王政期、日本史では、江戸時代（安土桃山時代を含む場合もある）を指す（広辞苑）」とされている時代である（【資料7-1】、【資料7-2】）。

天正10年(1582)、明智光秀を破った羽柴秀吉は、全国制覇に乗り出した。現薩摩川内市の泰平寺にある案内板では、島津義久の秀吉への降伏について次のように説明されている。

「天正15年(1587年)、天下統一を目前にしていた豊臣秀吉は、反抗勢力だった西の将・島津氏を討つために25万とも伝えられる大軍を動員し薩摩へ向けて出陣しました。九州上陸後、軍を二つに分け、日向方面を南下する秀吉長軍は、4月17日、根白坂（現宮崎県児湯郡木城町）で島津軍を撃破。肥後方面を下る秀吉軍は、川内平佐城を猛攻の末、同29日に開城させました。秀吉自身は、5月3日にかつての薩摩の中心地・川内の泰平寺の本陣に入って、島津氏の出方をうかがいます。降伏を決断した島津16代当主・島津義久は剃髪し、名を龍白と改めて、8日泰平寺に出向いて秀吉と対面、和睦の儀が行われました。会見は、両者とも武将らしい態度であったと伝えられ、和睦が成立（本領である薩摩国、大隅国と日向諸県郡を安堵され）、島津氏は存亡の危機を脱しました」。

九州全土を手中に収めようとしていた島津氏は、ここに秀吉の軍門に降ることになり、鹿児島県域も中世を脱し、近世に入ったのである。

泰平寺公園には秀吉と義久の「和睦石」が残されており、平成14年(2002)、薩摩川内市は「秀吉・義久和睦の像」と碑を建立している（【資料7-3】）。

【資料7-1】

近世略年表

年代	1601	1701	1801
時代	安土桃山	江戸	
西暦年 将軍等 西暦年	90 97 秀吉	03 05 23 51 80 家康 秀光 家綱 綱吉 09 13 16 45 60 87 家宣 家継 吉宗 家重 家治 家斉	37 53 58 66 家慶 家定 家茂 家慶 37 41 53 58 67 大政奉還
主なできごと	豊臣秀吉が北条氏を滅ぼす 慶長の役 関ヶ原の戦い	大坂夏の陣 鎖国の完成 正徳の治 享保の改革 元禄文化	田沼意次が老中に就任 寛政の改革 大塩の乱 天保の改革 ペリー来航 化政文化

（『詳説日本史図録』山川出版社pp. 339-343など、複数の資料を基に作成）

【資料7-2】

近世略年表（島津氏関係）

年代	1601	1701	1801
時代	安土桃山	江戸	
西暦年 島津家当主 西暦年	66 87 97 義弘	1602 38 87 1704 家久 光久 綱吉 吉貴 09 13 37 40 57 87 93 99 1600 09 13 37 40 57 87 93 99	21 46 49 55 87 1809 継宗 重重 斉宣 斉興 斉忠 08 29 53 73 79 1808 24 30 37 53 1705 08 29 53 73 79 1808 24 30 37 53
主なできごと	島津氏が豊臣秀吉に降伏する 慶長の役 義弘が関ヶ原の戦いに参加	大坂夏の陣 島津氏の鎮圧に加勢 山内検校の着工 高江新田官舎設置 喜界島大火 鹿児島大火 前田利右衛門が甘藷を試植	宣教師シドッチが屋久島上陸 綱吉養女竹姫が継豊に入興 木曾川治水工事手伝の幕命 造時館竣工・桜島大噴火 明治館竣工・桜島大噴火 近思録事件 宝島郷の財政改革 調子ノ来航 モリソン号事件

（『鹿児島県の歴史』山川出版社 付録pp. 12-14など、複数の資料を基に作成）

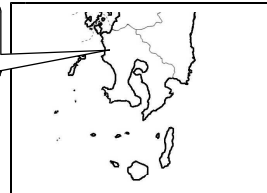
【資料7-3】

豊臣秀吉・島津義久の和睦

天正15（1587）年、豊臣秀吉が九州を制覇する。島津義久は泰平寺で秀吉と和睦する。



《和睦の像》



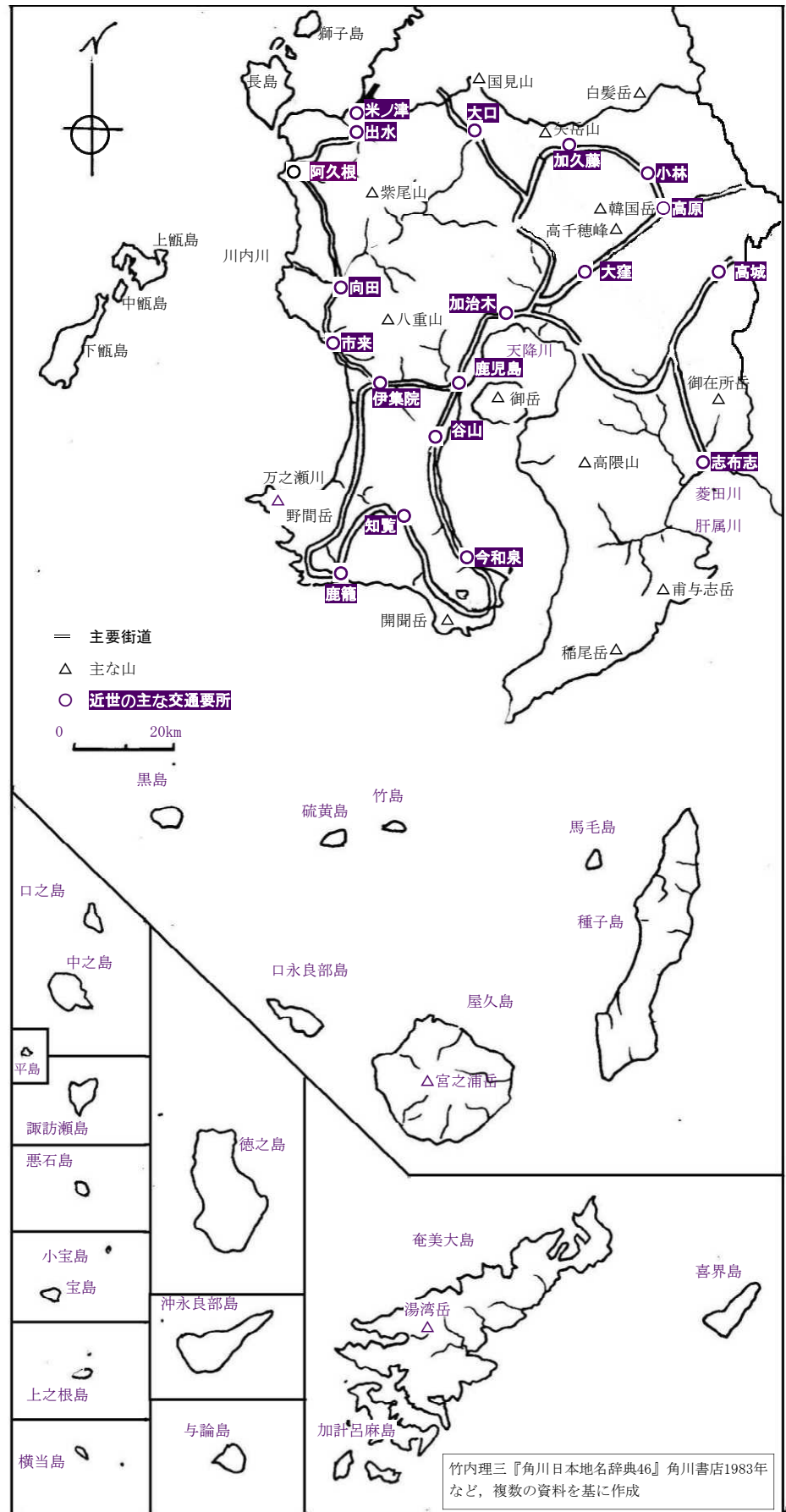
（薩摩川内市泰平寺公園）

《和睦石》

〔年表 7〕

《地図 7-1》 近世の宿次（薩摩藩の文書が伝達されるルート）

年代	主なできごと
1587	義久、泰平寺で秀吉に降伏する。
1592	文禄の役のため、義弘ら名護屋を発航する。
1598	慶長の役のため、義弘ら久見崎を発航する。
1600	関ヶ原の戦いで、義弘ら西軍に参加する。
1602	家康が忠恒に、薩・隅・日所領を安堵する。
1609	家久が琉球を侵攻し、家康から琉球領知黒印状を下付される。
1613	大島奉行を設置する。
1716	享保の改革 霧島山が噴火し、近傍の田畑が埋没する。
1729	綱吉養女竹姫が綱豊に入興する。
1753	木曾川治水御手伝普請の幕命がくだる。翌々年平田鞠負らが完成させる。
1763	重豪が財政の緊縮を命ずる。
1779	桜島が大噴火し、死者150人以上に及ぶ。
1787	寛政の改革
1816	徳之島母間村百姓一揆が発生する。
1824	英国捕鯨船が宝島に上陸し、牧牛略奪事件がおこる。
1830	重豪と斉興が、調所広郷に財政改革を命じる。
1837	米国船モリソン号が山川沖に碇泊する。
1840	調所広郷の財政改革が成功する。
1841	天保の改革
1851	斉彬が近代化政策を始める。



近世大名島津氏は、どのように鹿児島県域を治めたのであろうか。【資料7-4】と【資料7-5】に沿って述べてみたい。

17代当主義弘は、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで、西軍に属して徳川家と敵対関係になった。戦後、島津氏は国元では臨戦体制を敷きながら徳川氏に恭順の態度を示し、所領の三州安堵を認めさせることに成功した。以後、島津氏は江戸徳川將軍の支配下に組み込まれ、薩摩藩(鹿児島藩)となる。18代当主忠恒は慶長11年(1607)、家久(家康偏諱)と改名し、薩摩藩初代藩主となった。

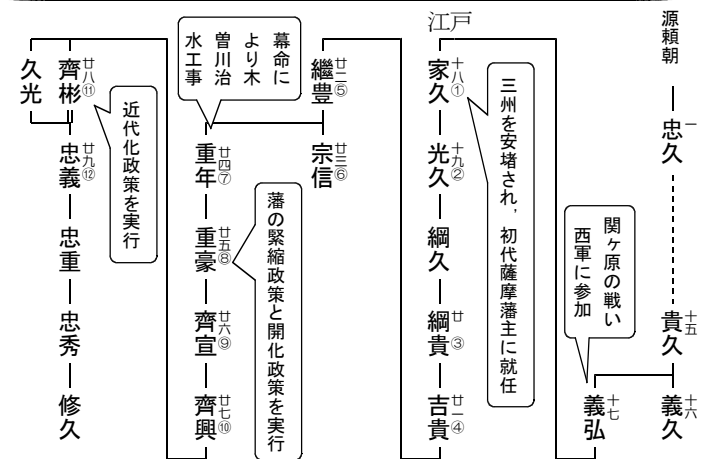
慶長14年(1609)、家久は琉球に侵攻して奄美群島を領有、琉球王国を支配下に置き、家康から琉球領知の黒印状を下付された。また、慶長18年(1613)には、大島奉行を設置した。これは、奄美群島の統治権が琉球王尚氏から島津氏に移ったことを意味している。

以後、琉球王国は薩摩藩と清国に両属する冊封体制をとることになり、奄美群島は道の島と呼ばれた。道の島では奄美大島と喜界島は大島奉行(のちに大島代官)が治め、元禄3年(1690)に沖永良部代官が設置されたあとは、同島と与論島を管轄するようになった。薩摩藩は直接的には道の島を支配したが、琉球は独立国家として処遇し、琉球を介した清国との貿易で利益を上げるようになった。

5代継豊は、享保14年(1729)、將軍綱吉の養女(のちに吉宗の養女)であった竹姫を妻とし、ここから島津家と徳川家の姻戚関係が強まった(【資料7-6】)。のちに孫にあたる重豪が一橋家の保姫を妻とし、重豪の娘である茂姫が一橋家の豊千代と縁組みをすることになったのも、竹姫が島津家に嫁いでいたことが、きっかけとなっている。豊千代は、のちに11代將軍に就任し、家斉と名を改める。

【資料7-4】

島津家略系図(近世)



(『島津氏正統系図』から作成。漢数字は当主、算用数字は藩主としての代数)

【資料7-5】

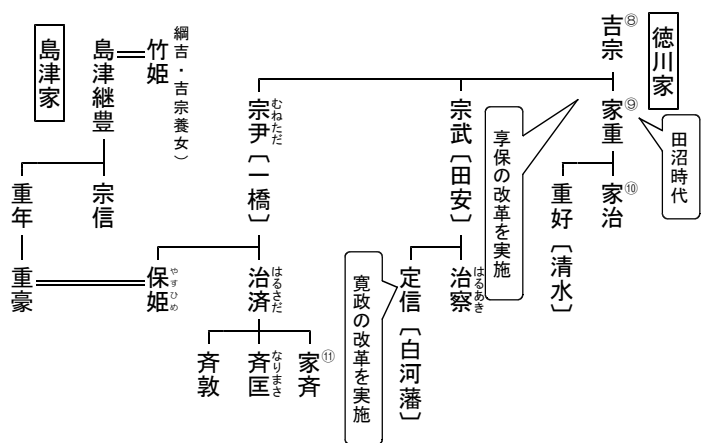
薩摩藩歴代藩主

代	名	生年	襲封	標	逝去	葬
①	家久	天正4年(1576)	慶長7年(1602)	37	寛永15年(1638)	63
②	光久	元和2年(1616)	寛永15年(1638)	50	元禄7年(1694)	79
③	綱貴	慶安3年(1650)	貞享4年(1687)	18	宝永1年(1704)	55
④	吉貴	延宝3年(1675)	宝永1年(1704)	18	延享4年(1747)	73
⑤	繼豊	元禄14年(1701)	享保6年(1721)	26	宝暦10年(1760)	60
⑥	宗信	享保13年(1728)	延享3年(1746)	4	寛延2年(1749)	22
⑦	重年	享保14年(1729)	寛延2年(1749)	7	宝暦5年(1755)	27
⑧	重豪	延享2年(1745)	宝暦5年(1755)	33	天保4年(1833)	89
⑨	齊宣	安永2年(1773)	天明7年(1787)	23	天保12年(1841)	69
⑩	齊興	寛政3年(1791)	文化6年(1809)	43	安政6年(1859)	69
⑪	齊彬	文化6年(1809)	嘉永4年(1851)	8	安政5年(1858)	50
⑫	忠義	天保11年(1840)	安政5年(1858)	40	明治30年(1968)	58

(『島津氏正統系図』から作成。算用数字は藩主としての代数)

【資料7-6】

島津家と徳川家の姻戚関係①



(『詳説日本史図録』など、複数の資料から作成。算用数字は將軍としての代数)

宝暦3年(1753)年、7代重年の時に木曾川治水御手伝普請(宝暦治水)の幕命が下り、家老の平田鞠負らいわゆる薩摩義士総勢1000人の努力により、これを成し遂げた(【資料7-7】)。

薩摩義士が注目されるようになったのは、明治30年代以降である。この時の縁により、鹿児島県と岐阜県は姉妹県盟約を結び、交流を深めている。

宝暦治水はおおよそ90人の死者を出すとともに、薩摩藩にとって藩財政が傾くほどの予算を投入した難工事であった。工事の費用について鹿児島県の歴史』では、次のように説明している。

「宝暦5年4月、工事は終了したが、それまでについやした工事費は40万両に達したといわれている。そのうち22万両は大坂で新たに借財したものであった。」

宝暦治水のあと藩主に就いた8代重豪は、財政緊縮政策をとり、藩主自ら一汁一菜に改めるなど範を示した。また、藩士にも倹約を求めたが、凶作や火災などにより効果が上がらなかった。一方で、藩政の開化政策を実施し、造士館や明時館などを建設したり、『南山俗語考』などの学問上重要な書籍を編纂したりした(【資料7-8】)。

鹿児島市の繁華街「天文館」の名の由来となった明時館ではどのような観測が行われていたのだろうか。

重豪の開化政策によって薩摩入りすることができた橘南谿(京都の医師)は、明時館の様子を【資料7-9】のように、その著書『西遊記』に書き残している。この資料から天文台がどのようなものであったかがうかがえ、ここでは、太陽の観測を行っていたり、星の観測により薩摩暦が作成されていたりしたことも分かる。南谿が「明白で見やすい」、「他の地では見られぬほど天文に詳しい」など、明時館のことを高く評価していることが分かる資料でもある。(※『西遊記』は「せいゆうき」と読む)

【資料7-7】

薩摩藩木曾三川治水工事の件



《平田鞠負像》

(鹿児島市平田公園)

○ 寶暦三年癸酉十二月二十五日蒙
台命一以レ役ヲ助ニ治ス美濃・伊勢・尾張
三州之諸川一ヲ、越テ明年甲戌二月起レ事
至ニ乙亥春三月一ニ逾年ニシテ而功畢ス、
將軍家賞ニ其ノ成功ヲ賜ニ時服五十領一ヲ、
與ニ子役一ニ等モ亦賜物各々有レ差
〔島津氏正統系図〕昭和六〇年 八〇頁

【資料7-8】

島津重豪の主な学術的業績

1 文武奨励と教育振興

- (1) 造士館の創建(安永2年(1773))
- (2) 演武館の創建(安永2年(1773))
- (3) 医学院の創建(安永3年(1774))
- (4) 明時館の創建(安永8年(1779))

2 各種書籍の編纂・刊行

- (1) 『南山俗語考』 ※中国語辞典
- (2) 『島津世家』『島津国史』 ※薩摩藩の正史
- (3) 『成形実録』『成形図説』 ※農業百科全書
- (4) 『質問本草』 ※薬草図鑑
- (5) 『鳥名便覧』 ※鳥名図鑑

3 博物学の先駆的事業

- 聚珍宝庫の建設 ※博物館

【資料7-9】

明時館(天文館)の様子

天文館には館の中央に切石にて数丈の高さに築上たる露台あり。其上に広なる星測の器を備へたり。天文生毎夜此上に登て星を測る。其露台の傍に日輪を窺ふの台あり。其中に量大鏡の大なるをしかけ、ゾングラスを当て、毎日日中に日輪を量る。館中にては天文生数人、算法を以て日輪の度数、毎夜の星の転移を推歩するに、台上にては毎夜毎日実物の実歩を伺ひはかりて、推歩と実測と合ふや違ふやをためす事を、毎日毎夜両方より励みて怠る事なれば、推歩測量共に皆妙に至れり。又曆を作りて国中に行はる。京都の曆を用ひず、彼の國の曆は書物のごとくとぞて、明白にて甚見やすし。七曜曆も作れり、天文の二曆ともに毎夜板行して行はる。天文のくわしき事は他方のなき所也。

橘南谿『西遊記』寛政七年(一七九五)

重豪以後の島津家と徳川家の姻戚関係を【資料7-10】に示す。前述のように、茂姫を一橋豊千代に嫁がせた重豪は、將軍岳父となり、高輪下馬將軍と呼ばれるほど力を強めていった。

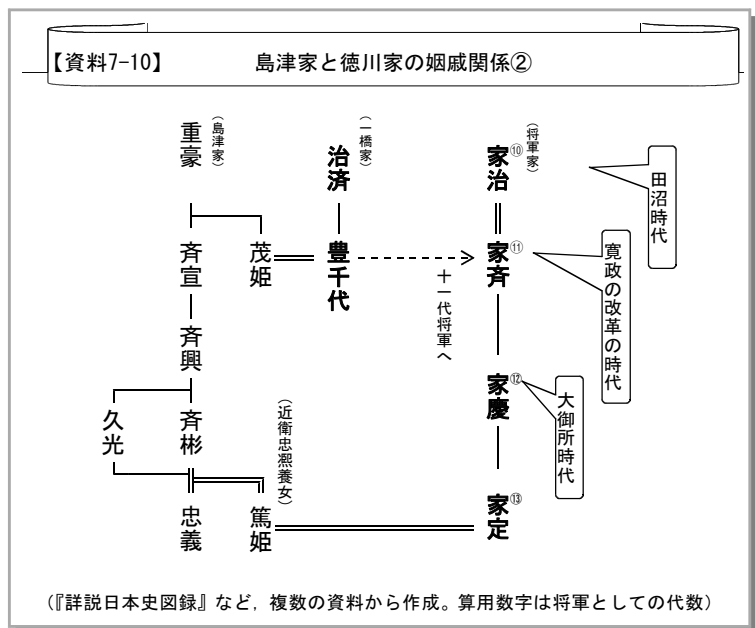
さて、薩摩藩の支配地は、外城制度によって治められていた。外城の中は【資料7-11】に示すように「門割」という行政組織で治められていた。重豪の改革は、この外城制度にも及んだ。

安政9年(1780)、重豪は外城を支配する武士団である「外城衆中」を「郷士」または「外城郷士」と改めることを布達し、ついで天明4年(1784)には「外城」をも「郷」と改めたのである。これは外城が城の扱いをされなくなったことを意味すると考えられ、芳即正氏はこの点に関して、「在郷藩士の藩政上に占める位置は、軍事的なものより行政的機能が重視されることになった」と指摘している。かつて軍団であった外城の下級武士が行政の末端役人となり、「文治主義的統治方針の徹底を期した」ものであるという。

なお、藩内には私領があった。私領主となり得たのは【資料7-12】に示す一門家や一所持などの大身の家柄である。近世における薩摩藩の郡郷・私領を《地図7-2》に示す。

次の9代斉宣は、重豪の政策に反したため、その怒りに触れ、藩主をやめさせられた。10代斉興の頃、重豪は家老調所広郷に財政再建を命じ、広郷は藩債の事実上の踏み倒しと琉球貿易等により、これを達成したとされている。

斉興は、藩財政が好転した頃、蘭癖大名の重豪の影響を受けて育った息子斉彬を藩主に就けるのを嫌がった。そこに斉彬の弟久光を藩主に推す勢力が台頭したため、お家騒動に発展した(高崎くずれ)。しかし、老中阿部正弘の斡旋により斉彬が11代藩主に就任し、篤姫を將軍家定に入興させるなどして徳川家との関係を強めていった。



【資料7-11】 外城の行政組織と支配形態

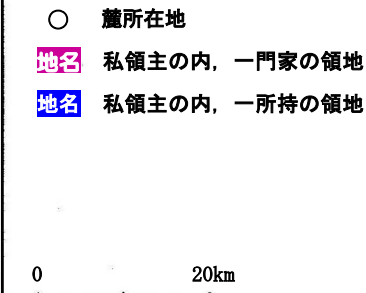
行政組織 (門割)								支配者	
外城 (郷)								じとう	地頭
ざいそん 在村				在村				しょうや	庄屋
ほうざり 方限		方限		方限		方限		なぬし	名主
かどち 門地	門地	門地	門地	門地	門地	門地	門地	みようず 名頭	
家部	家部	家部	家部	家部	家部	家部	家部	なご 名子	
※	地頭 (武士) は鹿児島城下に居住し、実質は所三役 (郷士) が支配								
※	在村は庄屋 (武士) が支配し、名主 (農民) が補佐								
※	野町、浦浜も在村同様に武士が支配し、農民代表が補佐								
(原口泉ら『鹿児島県の歴史』山川出版社など、複数の資料から作成)									

【資料7-12】 薩摩藩士の家格と戸数 (文政9年頃)

	家格	石高	主な家と戸数
①	一門家	1万石以上	加治木家, 重富家, 垂水家, 今和泉家
②	一所持	500石以上	喜入肝付家など17家
③	一所持格	500石以上	30家
④	寄合	500石以上	58家
⑤	寄合並	500石以上	10家
⑥	小番	200石以上	816家
⑦	新番	100石以上	231家
⑧	小姓組	30石以上	3088家
⑨	外城衆中	50石以下	不明
⑩	座附士	30石以下	不明
⑪	足輕	約3石6斗	不明

(芳即正『調所広郷』吉川弘文館p.3掲載の表から作成)

とじょう



- 26 -

8 近代「明治～昭和時代(前期)」の鹿児島県

近代とは、「広義には近世と同義で、一般には封建社会のあとをうけた資本主義社会についていう。日本史では明治維新から太平洋戦争の終結までとするのが定説（広辞苑）」とされている時代である。本稿では、幕末から太平洋戦争終結までを取り扱う（【資料8-1】、【資料8-2】）。

日本の近代化に薩摩藩はどのように関わっていたのだろうか。薩摩藩は嘉永6年(1853)のペリー艦隊の浦賀来航以前から、宝島事件や、モリソン号事件等を経験しており、琉球に西洋各国の艦船が来航していることも把握していた。11代藩主島津斉彬は、拡大する西洋帝国主義に対抗するために、嘉永4年(1854)、仙巖園付近（鹿児島市吉野町磯）に製錬所・反射炉等を築き、近代産業を興した。これを集成館事業という。集成館事業の目的は「富国強兵」、「殖産興業」であった。安政5年(1858)、斉彬が没すると集成館事業は縮小されたが、文久3年(1863)の薩英戦争を経験し西洋の技術力の高さを知ることになった。

慶応元年(1865)、薩摩藩が英国留学生を派遣したこの年、再度、集成館事業が始まった。慶応3年(1867)には、日本初の洋式紡績工場である鹿児島紡績所が完成した。同時期に建設された英国人技師館（異人館）などを含めた一連の産業施設は、平成27年(2015)7月5日、「明治日本の産業革命遺産」として、ユネスコの世界文化遺産に登録された（【資料8-3】）。

集成館事業は、薩摩の国力を高めた。薩摩藩はそれまで推進してきた公武合体や公議政体などの幕府改革路線を捨て、尊皇倒幕に傾いていくが、大政奉還、戊辰戦争等を経て明治新政府が樹立する過程で、西郷隆盛や大久保利通ら薩摩藩士が活躍することができたのも、この事業に負うところが大きいと思われる。

【資料8-1】

近代略年表

時 代	江 戸					明 治					大 正			昭 和								
西暦年	1853	68	69	71	73	77	85	89	94	1904	12	14	29	31	32	34	36	37	40	41	45	
主 な で き ご と	ペリー来航 戊辰戦争・明治改元 版籍奉還 廃藩置県・岩倉使節団出発 地租改正 西南戦争 内閣制度創設 大日本帝国憲法の発布 日清戦争 日露戦争 第一次護憲運動 第一次世界大戦 世界恐慌 柳条湖事件 五・一五事件 満州国帝政実施 二・二六事件 盧溝橋事件 日独伊三国同盟 太平洋戦争終結 日米開戦																					

『詳説日本史図録』山川出版社pp. 344-349の年表等を基に作成

【資料8-2】

近代略年表（鹿児島県関係）

時 代	江 戸	明 治									大 正			昭 和								
西暦年	1851	59	68	70	71	76	77	83	89	94	1901	12	14	27	34	35	36	39	41	42	45	
主 な で き ご と	磯に製錬所・反射炉を設置	西郷隆盛が大島へ	戊辰戦争	廃藩置県により	宮崎県を廃し、鹿児島県と合併	西南戦争（西郷没）	県立中学造士館を設立	鹿児島市政実施・町村制実施	県立尋常中学校設立	第七高等学校造士館設立	県立図書館設立	桜島大噴火	昭和天皇が大島行幸	鹿児島港竣工	鹿児島放送局開設	鹿児島海軍航空隊飛行場完成	鹿児島県産業報国会発足	尋常小学校を国民学校と改称	知覧陸軍飛行場完成	鹿児島市庁舎内に占領軍事務所設置		

（原口泉ら『鹿児島県の歴史』山川出版社 付録pp. 15-17の年表等を基に作成）

【資料8-3】

集成館事業



《尚古集成館》



《仙巖園内に残る反射炉跡》



《4分の1サイズで復元された反射炉模型》

幕末、西郷隆盛はどのような動きをしていたのだろうか。【資料8-4】を基に安政5年(1858)の斉彬の逝去頃から、その流れを追ってみることにする。

大老井伊直弼による安政の大獄が始まると、西郷は近衛家から僧月照の保護を要請されたが、安政の大獄に巻き込まれることを恐れた藩当局に拒まれ、月照とともに錦江湾に身を投げた。この時、月照は死亡したが、西郷は蘇生し、翌年、菊池源吾と改名し奄美大島に潜居することになった。西郷が蘇生した家は鹿児島市吉野町に、大島で潜居した家は龍郷町に現存している。

文久2年(1862)、久光は1000人余りの兵を率いて上洛し、のち江戸に下向して、いわゆる文久の改革を提案した。この直前、西郷は一度許され、鹿児島に戻り、久光の上洛に先発したが、下関で合流するという久光の命に背いたとして最初は徳之島へ、のちに沖永良部島へ流罪となった。西郷が徳之島で過ごしている間に、薩摩藩は生麦事件をおこし、薩英戦争(文久3年(1863))に突入するのである(【資料8-5】)。

薩英戦争後、薩摩藩はイギリスとの関係を強め、慶応元年(1865)には、英国に留学生を派遣した。この時の英国留学生の像が「若き薩摩の群像」として、鹿児島中央駅広場に建設されている。また、いちき串木野市の薩摩藩英国留学生記念館(平成26年建設)では、その偉業を詳細に説明している。

慶応2年(1866)、坂本龍馬の仲介で西郷と木戸孝允が会談し、薩長同盟が成立すると、薩摩藩は倒幕へ突き進むことになった。この時期の日本は、將軍を中心とする幕藩体制を維持しようとする勢力と、天皇を中心とする中央集権国家をつくり諸外国に対峙しようとする勢力のせめぎあいの時代であった。薩摩藩は、約260年間にわたって、支配されながらも良好な関係を保っていた徳川幕府を倒す先頭に立ったのである(【資料8-6】)。

【資料8-4】 幕末略年表(鹿児島県関係)

年 代	嘉永	安政						文久						元治	慶応						明治				
	6	元	2	3	4	5	6	元	2					3	元	2	元	2	3	元	2				
西暦年	1853	54	55	56	57	58	59	60	62					63	64	65	66	67	68	69					
主 な で き ごと	ペリ ー が 来 航 す る	溶 鉱 炉 が 竣 工 す る	昇 平 丸 を 幕 府 に 献 上 す る	磯 内 が 下 田 に 着 任 す る	齊 彬 が 急 逝 忠 義 が 襲 封	安 政 の 大 獄 西 郷 錦 江 湾 に 投 身	西 郷 隆 盛 が 大 島 に 潜 居 さ せ ら れ る	桜 田 門 外 の 変 が 起 こ る	和 宮 降 嫁	西 郷 が 許 さ れ て 鹿 兒 島 に 帰 る	久 光 が 兵 を 率 い て 鹿 兒 島 を 出 発	寺 田 屋 事 件 が お こ る	久 光 が 江 戸 に 下 向 す る	西 郷 が 沖 永 良 部 島 に 流 罪 に な る	生 麦 事 件 が お こ る	薩 英 戦 争 が お こ る	西 郷 が 許 さ れ て 鹿 兒 島 に 帰 る	第 一 次 長 州 征 伐	第 二 次 長 州 征 伐	薩 摩 藩 英 国 留 学 生 を 派 遣	薩 長 同 盟 が 成 立 す る	大 政 奉 還	鳥 羽 ・ 伏 見 の 戦 い	西 郷 ・ 勝 会 談	函 館 五 稜 郭 の 戦 い

(原口泉ら『鹿児島県の歴史』山川出版社 付録pp. 14-15を基に作成)

【資料8-5】 薩英戦争

交渉が進まないことに業を煮やしたイギリス側は、七月二日(八月十五日)、悪天候について薩摩藩汽船天祐丸・白鳳丸・青鷹丸の拿捕にふみ切った。三隻の購入価格が賠償金を上まわったため、これを担保に薩摩側を交渉のテーブルにつけようとしたのである。しかしこれをみた薩摩側は開戦を決意。正午、天保山からの砲撃を合図にイギリス艦隊を攻撃しはじめた。

突然の砲撃にイギリス艦隊はあわてふためいた。軍艦で威圧すれば薩摩側が譲歩してくると考えていたため戦闘準備をととのえていなかったためである。しかし艦隊司令キユーバー提督は沈着で、まず足手まといとなる薩摩藩汽船を焼き沈めさせ、艦隊を鹿児島城下の北・御船(鹿児島市吉野町)沖に集結させた。そこで戦闘準備をととのえたあと艦隊を南下させ、薩摩藩の砲台に激しい砲撃をあびせた。砲撃戦は翌三日まで続き、薩摩の諸砲台は、イギリス艦隊が装備する最新式アームストロング砲によって壊滅的狀態におちいった。また城下町の一部分と集成館の工場群も焼失し、一八人の死傷者が出た。だが薩摩側も旧式砲ながら善戦し、多くの艦に命中をあたえ、旗艦ユーリアスの館長ジョスリン大佐以下六三人の将兵を負傷させた。こうして両者痛み分けの形で戦闘は終了。四日、イギリス艦隊は鹿児島湾をあとにして横浜へと向かった。

(原口泉氏ら『鹿児島県の歴史』(山川出版社)二五〇頁から引用)

【資料8-6】 幕末～明治初期略年表

年代	慶元	2	3	明治元	2	3	4	5	6
西暦年	1865	66	67	68	69	70	71	72	73
月	3	1	7	12	5	6	10	12	1
主なできごと	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する	薩摩藩が英吉利の留学生を派遣する

(『詳説日本史図録』山川出版社pp. 344-345の年表等を基に作成)

明治2年(1869)6月17日、薩長土肥四藩連署の版籍奉還上表が許可され、島津忠義が鹿児島藩知事に任命された。これにより旧幕府領以外的大名領地を名目上明治政府が所管することとなった。しかし、依然として知藩事である旧大名の権限が強かったため、明治4年(1871)7月14日、明治政府はクーデター的に廃藩置県に踏み切った。この廃藩置県により全国3府302県の1つとして旧薩摩藩領域を継承した鹿児島県が誕生した(【資料8-7】)。

同年11月14日、旧薩摩藩領は、鹿児島・都城両県に分割され、一部は美々津県に属した。明治5年(1872)5月15日、都城県のうち大隅の始良・菱刈両郡と桑原郡栗野・横川両郷を鹿児島県に合併。同年9月14日、琉球国を鹿児島県から分離した。明治6年(1873)1月15日、都城県所管の大隅国は全て鹿児島県となり、日向国一円は宮崎県となった(【資料8-8】)。また、奄美群島及びトカラ列島は、第二次大戦後に分断されるまで鹿児島県であった。

その後、明治9年(1876)8月21日宮崎県を廃止し、鹿児島県に合併した。明治10年(1877)の西南戦争で西郷隆盛が死去し、明治11年(1878)の紀尾井坂の変で久保利通が死去すると、薩摩藩閥は勢力を削がれ始めた。旧宮崎県区域が鹿児島県からの分県運動を起こした結果、明治16年(1883)5月9日、宮崎県を分離して現在の鹿児島県域及び宮崎県域が確定した(【資料8-9】)。

宮崎県分県運動が起こったのは、一説によると西南戦争後の復旧活動を薩摩地方・大隅地方を優先し、日向地方が後回しにされたからであるという。

この時、中世の島津荘と縁の深い旧日向国の諸県郡は南北に分けられ、北諸県郡(都城市など)は宮崎県に所属したが、南諸県郡(現在の志布志市及び大崎町)は鹿児島県に残留することを希望し、現在に至るまで鹿児島県に属している。

【資料8-7】

南九州における廃藩置県①

明治元(1868)	明治改元
明治4(1871)	〔7月14日〕第一次廃藩置県で、南九州に鹿児島県、飫肥県、佐土原県、高鍋県、延岡県、人吉県、日田県の7県が設置された。 〔11月14日〕第二次廃藩置県で、鹿児島県、都城県、美々津県になった(【資料8-8】A)。
明治5(1872)	〔5月15日〕都城県の一部を鹿児島県に編入した。 〔9月14日〕琉球国を鹿児島県から分離した。
明治6(1873)	〔1月15日〕都城県、美々津県を廃止し、日向国一円を宮崎県として新設された(現在の志布志市と大崎町は宮崎県に入っていた【資料8-8】B)。
明治9(1876)	〔8月21日〕鹿児島県が宮崎県を合併した(【資料8-9】C)。
明治10(1877)	〔2月15日〕西南戦争が勃発した。
明治12(1879)	〔3月11日〕沖縄県を設置した。
明治16(1883)	〔5月9日〕鹿児島県から宮崎県が分離独立した(志布志市と大崎町は鹿児島県に残った。)これにより、現在の鹿児島県域が確定した(【資料8-9】D)。

(『鹿児島県の歴史』山川出版社pp.269-271など、複数の資料を基に作成)

【資料8-8】

南九州における廃藩置県②

明治4年(1871)11月以降の鹿児島県域

明治6年(1873)1月以降の鹿児島県域



(『鹿児島県の歴史』山川出版社pp.269-271など、複数の資料を基に作成)

【資料8-9】

南九州における廃藩置県③

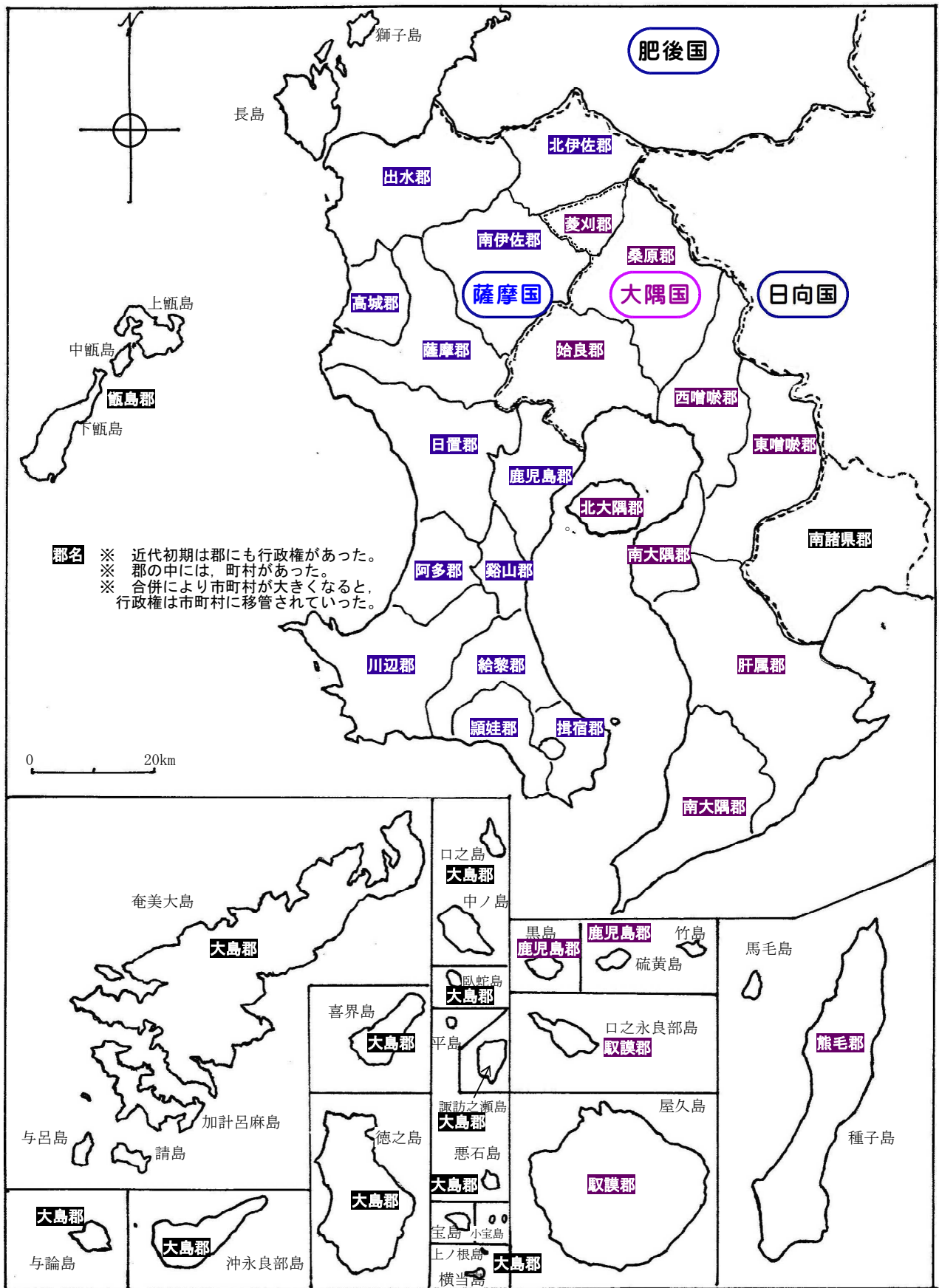
明治9年(1876)8月以降の鹿児島県域

明治16年(1883)5月以降の鹿児島県域



(『鹿児島県の歴史』山川出版社pp.269-271など、複数の資料を基に作成)

《地図8》 近代鹿児島県域における郡



※ この略地図は、竹内理三氏編集の『角川日本地名辞典46【鹿児島県版】(角川書店1983年)』に掲載されている資料など、複数の資料を基に作成したものである。

「明治六年の政変」で下野した西郷に従って鹿児島に帰ってきた青年子弟の教育のために、明治7年(1874)、私学校が建てられた。

本県出身者である大山綱良県令の積極的支援を受け、鹿児島県行政は次第に私学校派で固められるようになったため、内務卿大久保利通は、独立国のような郷里鹿児島と政府の板挟みとなった。ついに明治政府は大山県令の更迭、集成館や草牟田火薬庫の火薬の搬出、警視庁警部らの偵察などの強硬策をとった。

明治10年(1877)、政府の挑発的行為に暴発した私学校生ら薩摩士族におされ、西郷が「今般政府へ尋問之筋有之」として「率兵上京届（【資料8-10】）」を提出し、同年2月15日豪雪の中、一番大隊・二番大隊が出発した。西南戦争の勃発である。

西南戦争は、熊本城の攻撃、田原坂の戦いなど、南九州各地での戦闘を経て、鹿児島城山での西郷自刃により幕を閉じた（【資料8-11】、【資料8-12】）。

西南戦争以降、日本国内で内戦は発生していないため、これが日本史上最後の内戦となった。また、徴兵制によって組織された近代的な軍備により、農民出身の兵士でも、士族出身の兵士を撃破できることが世に示されることとなった。しかし、戦争初期においては、政府軍は軍備で勝っていながら、士気の高い西郷軍の士族兵になかなか勝利することができなかった。政府軍副司令官山県有朋は、旧士族が多く在籍していた警察を頼みにし、抜刀隊を編成して西郷軍にあたった。特に旧会津藩出身の隊士は、戊辰戦争の雪辱戦とばかりに戦ったと言われている。

西郷軍の士気が高かったのは西郷隆盛が総大将であったからだと考えた明治政府は、天皇を大日本帝国陸軍・海軍の大元帥に就かせて、軍の士気高揚を図るようになったのである。

【資料8-10】 西郷隆盛らによる「率兵上京届」

拙者共事先般御暇之上非役にて帰県致居候処、今般政府へ尋問之筋有之、不日に当地発程致候間、為御含此段届出候。尤舊兵隊之者共随付、多人数出立致候間、人民動揺不致様、一層御保護及御依頼候也

明治十年二月十二日

陸軍大将 西郷隆盛
陸軍少将 桐野利秋
陸軍少将 篠原国幹

（原口虎雄『鹿児島県の歴史』二三九頁掲載資料から抜粋）

【資料8-11】 西南戦争の主な経緯

2月12日	西郷らが「率兵上京届」を県庁に提出
2月15日	一番大隊・二番大隊が出発
2月17日	西郷が桐野・村田らとともに東目街道より出発
2月19日	鹿児島県逆徒征討の詔が発せられ、政府は、正式に西郷軍鎮圧の出兵を決定
2月22日	西郷軍が熊本鎮台（熊本城）を攻撃
3月1日～ 3月31日	現在の熊本県熊本市植木町大字豊岡で田原坂・吉次峠の激戦が繰り広げられた。
4月8日	熊本鎮台突圍隊が官軍背衝軍との連絡に成功
4月15日	西郷軍が総退却を始める
9月1日	西郷ら鹿児島に帰り、城山に立て籠もる
9月24日	西郷が自刃し、西郷軍の将士も戦死・自刃

（原口虎雄『鹿児島県の歴史』pp.237-241など、複数の資料を基に作成）

【資料8-12】 西郷隆盛洞窟 と 城山麓の西郷銅像

雨は降る降る
人馬は濡れる
越すに越されぬ
田原坂



《西郷隆盛洞窟》



《西郷隆盛銅像》

ここで、西南戦争後の鹿児島の教育について触れておく。明治10年(1877)の学齢児就学率が【資料8-13】に示すように22.9%であり、全国平均を大きく下回っていた。これは、学制改革により、全国に小学校が設置されることになったものの、経費は民費負担が原則であったため、学校設置は困難であったからである。明治20年代後半に入り、中学校も設置され始め、明治30年代には中学校入学者も増加したが、高等学校へ進学する者は少数であったとされている。

そのような中、明治27年(1894)、日清戦争が勃発し、明治37年(1904)、日露交渉の行き詰まりにより日露戦争が勃発した。列強ロシアとの戦いは、当時の日本にとって国家存亡の命運をかけた戦いであった。鹿児島市の多賀山公園には、この戦争で日本海軍を指揮し、ロシア艦隊を撃破した東郷平八郎の銅像が建立されている【資料8-14】。旗艦三笠にZ旗が翻り、東郷が発したとされる「皇国の興廃この一戦にあり」という言葉からも、この戦争の勝敗がその後の日本や世界に大きな影響を与えたことが推測される。多賀山にある東郷元帥の碑では「海上決戦に依て其祖国を救った二大提督は、日本の東郷と、英国のネルソンであると世界が既に公認している」と説明されている。

大正3年(1914)には、桜島が大噴火し、大隅半島と陸続きになった。この時の内閣総理大臣は、鹿児島県出身の海軍大将山本権兵衛であった。山本は、黒田清隆、松方正義に次ぐ3人目の鹿児島県出身の総理大臣である。山本がジーマンス事件で失脚すると、大隈重信が組閣し、日本は第一次世界大戦へと突き進んだ(【資料8-15】)。

大正12年(1923)9月1日、関東大震災が発生した。その翌日、第二次山本権兵衛内閣が組閣され、山本は震災の混乱を処理した。このため第二次山本内閣は「地震内閣」と呼ばれた。

【資料8-13】 近代における鹿児島県の教育

明治4年(1871)	文部省設置
明治5年(1872)	学制発布 [下等小学校4年, 上等小学校4年]
明治6年(1873)	鹿児島県内の小学校数98校, 児童数13,066人
明治10年(1877)	鹿児島県内の小学校数717校, 児童数46,150人 学齢児就学率22.9% (全国平均33.9%)
明治18年(1885)	内閣制度発足に伴い、森有礼が初代文部大臣に
明治19年(1886)	小学校令公布[尋常小学校4年, 高等小学校4年]
明治23年(1890)	鹿児島県内の尋常小学校児童数53,518人
明治27年(1894)	県立鹿児島第一中学校が開校
明治30年(1897)	川内中学校, 加治木中学校が開校
明治34年(1901)	小学校学齢児就学率が90%を超える 第七高等学校造士館設立

(『鹿児島県の歴史』山川出版社pp.278-280など、複数の資料を基に作成)

【資料8-14】 東郷墓地と多賀山公園

「皇国の興廃 この一戦にあり、
各員一層奮励 努力せよ」

THE FATE OF OUR EMPIRE DEPENDS
UPON THIS SINGLE BATTLE
LET EVERYONE DO HIS BEST

1905年(明治38)、旗艦三笠にZ旗がひるがえり、日本海海戦の火ぶたが切っておとされました。東郷平八郎は連合艦隊司令長官としてこの海戦を指揮。丁字戦法によって、無敵のロシアバルチック艦隊を全滅させたのです。(後略)
(鹿児島市)



《東郷平八郎像》

【資料8-15】 近代後半略年表(鹿児島県関係)

年	明治34	35	41	大正元	3	4	12	昭和元	2	10	11	16	17	18
西暦年	1901	02	08	12	14	15	23	26	27	35	36	41	42	43
月	3	4	4	4	1	6	9	7	5	10	11	12	3	12
主なできごと	第七高等学校造士館設立	県立高等女学校設立	大島郡で町村制実施	県立図書館設立	桜島大噴火	集成館事業廃止	関東大震災	郡制廃止 熊毛・大島両支庁設置	天皇の大島行幸	鹿児島放送局開設	鹿屋海軍航空隊飛行場完成	大政翼賛会県支部発足	知覧陸軍飛行場完成	徳之島に海軍飛行場着工
	明治37年(1904) 日露戦争勃発						大正3年(1914) 第一次大戦勃発					昭和16年(1941) 太平洋戦争勃発		

(『鹿児島県の歴史』山川出版社pp.278-280など、複数の資料を基に作成)

9 現代「昭和時代(中・後期)～平成時代」の鹿児島県

現代とは、「世界史的には一般に、大衆社会の成立をみた19世紀末以後、あるいは資本主義社会と社会主義社会の並立した第一次大戦後をさすが、日本史では、第二次大戦後をさすことが多い」(三省堂大辞林)とされている時代のことである。本稿では、太平洋戦争以降を取り扱う(【資料9-1】、【資料9-2】)。

鹿児島県が西南日本にあるという自然的条件は、太平洋戦争中も県民に大きな影響を与えた。南から侵攻してくるアメリカ軍に備えるため、島嶼部の児童を本土に疎開させたこともその一つである。また、知覧陸軍飛行場からは、若い戦士が神風特別攻撃隊として太平洋の戦場に旅立っていった。

戦争が終結すると、鹿児島市役所の庁舎内に占領軍の軍政事務所が設置され、昭和21年(1946)2月2日には、北緯30度以南の島嶼部を日本から分離した。これにより、十島村は分断され、北部三島での自治体が成立するとともに、同年10月3日に北部南西諸島政庁が成立し、昭和25年(1950)11月25日に奄美群島政府に改称された。昭和26年(1951)にサンフランシスコ講和条約が締結され、日本が主権を回復することになっても、奄美群島は分断され続けた。昭和27年(1952)には奄美群島政府が廃止され、琉球中央政府の奄美地方庁となった。奄美群島では分離直後から泉芳朗らを中心として祖国復帰運動が始まっていたが、いよいよ激しさを増した。米国政府は復帰運動を受けて、昭和28年(1953)12月25日、日本へのクリスマスプレゼントとして奄美群島の統治権を日本に返還した(【資料9-3】)。これに先だちトカラ列島も既に日本へ返還されていたことから、この日をもって現在の鹿児島県域が確定したということになる。

《地図9-1》に鹿児島県内の昭和の大合併後の市町村を示す。

【資料9-1】

現代〔昭和〕略年表

年	昭和20	21	26	28	31	39	43	45	47		54	60	61
西暦年	1945	46	51	53	56	64	68	70	72		79	85	86
月	8	11	9	2	12	10	4	3	2	3	9	6	4
主なできごと	戦争終結の詔書を放送	日本国憲法公布	サンフランシスコ講和会議	NHKテレビ放送開始	日本が国連に加盟	東海道新幹線開通・東京五輪開催	小笠原諸島返還協定調印	大阪万国博覧会開催	札幌冬季五輪開催	沖縄の施政権返還・沖縄県発足	日中共同声明調印	東京で先進国首脳会議開催	N T T・J T が発足
													J R グループ7社が発足

(『詳説日本史図録』山川出版社pp. 347-352の年表等を基に作成)

【資料9-2】

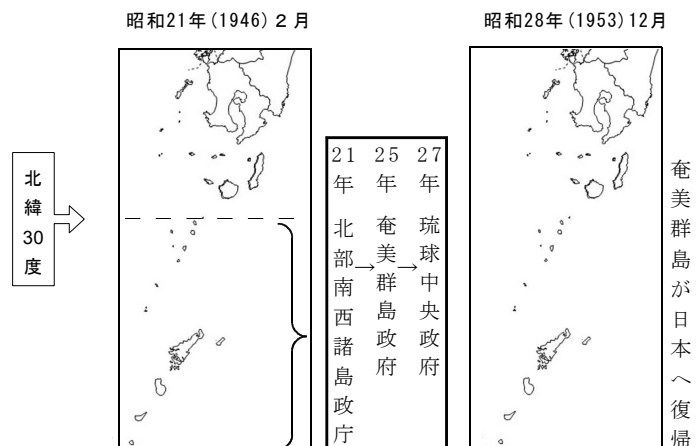
現代〔昭和〕略年表(鹿児島県関係)

年	昭和20	21	26	28	31	37	43	45	47		54	55	63
西暦年	1945	46	51	53	56	62	68	70	72		79	80	88
月	10	2	2	12	9	2	4	3	4	7	10	9	12
主なできごと	鹿児島市庁舎に占領軍軍政事務所	北緯30度以南を日本から分離	奄美大島日本復帰協議会結成	奄美群島日本復帰(鹿児島県に)	桜島昭和の大噴火	内之浦から第一号ロケット発射	明治百年記念式典開催	与次郎ヶ浜埋立工事開始	鹿児島(清辺)空港開港	太陽国体夏季大会開催	平川動物公園開園	大久保利通銅像除幕式	新大隅開発計画を正式決定
													鹿児島国際火山会議開催

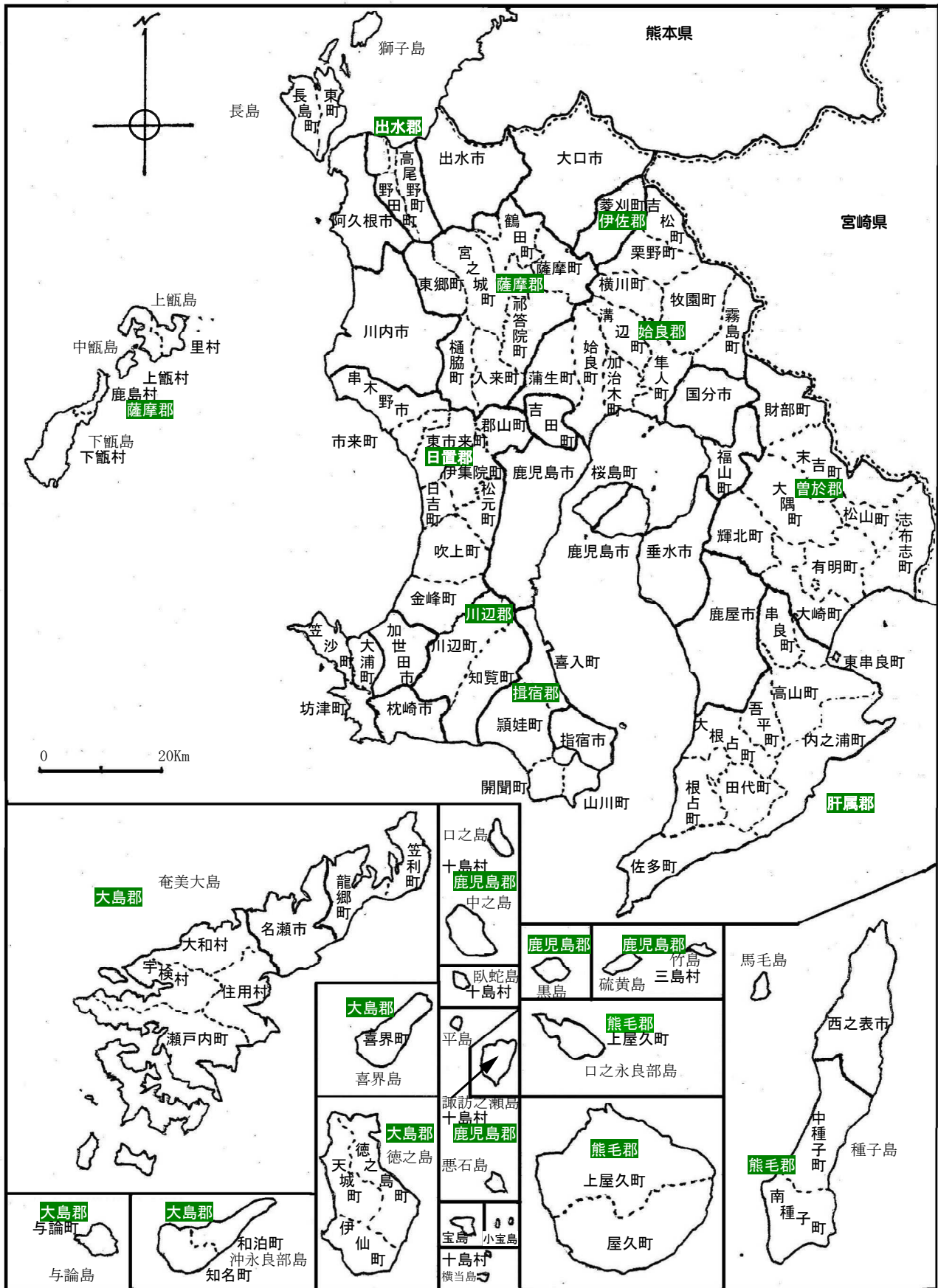
(『鹿児島県の歴史』山川出版社 年表pp. 14-15など、複数の資料を基に作成)

【資料9-3】

奄美群島の分断と日本復帰



《地図9-1》 鹿児島県の市町村（昭和の大合併以降）



※ この略地図は、竹内理三氏編集の『角川日本地名辞典46【鹿児島県版】（角川書店1983年）』に掲載されている資料など、複数の資料を基に作成したものである。

平成以後の主なできごとを【資料9-4】、【資料9-5】に示す。

日本の近代化、現代化は道路網と鉄道網の整備により急激に進んだ。高度経済成長時代には、自家用車が普及し、輸送手段はトラックが中心となった。各地の道路が整備され、また、高速道路の建設も始まった。

一般道路は、近世の街道を拡幅したりバイパス化したりして、自動車の走行を可能にするよう整備されてきた。

近世の肥後筋へ向かう西回り街道（いわゆる「薩摩街道」）に沿って国道3号が建設されたが、厳密にはそのまま拡幅したものではない（《地図7-1》と《地図9-2》を比較参照）。

近世において大口筋へは吉野台地の寺山方面へのぼり、重富の白銀坂をくだる難所を越えていた。これは、藩政時代の鹿児島の防衛には効果があったが、近代においては不便であった。

明治6年(1873)、始良方面から鹿児島へ入る道が錦江湾沿いに建設され、国道10号の一部となった。国道10号は、かつて島津家の別邸であり一般の往来が禁じられていた仙巖園前を通り、上町に入る。国道3号と10号は、城山麓の照國神社前で交わっている。

西郷像前から海岸へ向かう国道58号は、種子島、奄美大島を経由して沖縄県那覇市へ向かう。総延長877.8kmの内、海上部分が609.5kmに及んでいる。

鹿児島県内に建設されている国道の一覧を【資料9-6】に、九州自動車道の建設年表を【年表9-1】に示す。

平成5年(1997)8月の豪雨により、竜ヶ水地区の急傾斜地が崩れ、国道10号を走行中の車と、日豊本線竜ヶ水駅で停車中の列車に被害が出た。この年の豪雨は、鹿児島県内各地に災害をもたらした。歴史的遺産の被害としては、鹿児島市甲突川に江戸時代後期にかけられた五石橋の内、武之橋等が崩壊したことが挙げられる。

残った西田橋等は、現在、鹿児島市にある石橋記念公園と祇園之洲公園に移設保存され、観光客で賑わっている。

【資料9-4】

現代〔平成〕略年表

年	平成元	3	5	7	8	9	10	11	15	16	23	27	32	
西暦年	1989	91	93		95	96	97	98	99	2003	04	11	15	20
月	④	④	⑦	⑫	①	④	⑫	⑧	④	④	⑤	③	⑦	
主 な で き ご と	消費 税3% を 実 施	海 上 自 衛 隊 を ペ ル シ ア 湾 へ 派 遣	北 海 道 南 西 沖 地 震 （ 奥 尻 島 被 災 ）	姫 路 城 等 が 世 界 遺 産 に 登 録	阪 神 淡 路 大 震 災	日 米 安 全 保 障 宣 言	地 球 温 暖 化 防 止 京 都 議 定 書 採 択	北 朝 鮮 が ミ サ イ ル 実 験	改 正 男 女 雇 用 機 会 均 等 法 成 立	日 本 郵 政 公 社 成 立	北 朝 鮮 拉 致 被 害 者 5 人 帰 国	東 日 本 大 震 災 が 発 生	旧 集 成 館 機 械 工 場 等 が 世 界 遺 産 に	東 京 オ リ ン ピ ッ ク 開 催

（『詳説日本史図録』山川出版社pp.352-353など、複数の資料を基に作成）

【資料9-5】

現代〔平成〕略年表（鹿児島県関係）

年	平成元	3	5	7	8	9	10	11	16	23	27	32		
西暦年	1989	91	93		95	96	97	98	99	2004				
月	①	⑨	⑧	⑫	⑦	④	③	⑩	⑦	③	⑩	③	⑥	
主 な で き ごと	鹿児島市政百周年記念式典	新幹線鹿児島ルート起工式	鹿児島市を中心に豪雨災害	屋久島が世界自然遺産に登録	九州自動車道全線開通	鹿児島県庁が現在地に移転	鹿児島県北西部地震災害	薩摩焼四〇〇年記念行事開催	ザビエル鹿児島上陸四五〇年記念	九州新幹線一部開業	薩摩川内市誕生（平成合併一号）	九州新幹線全線開通	口永良部島新岳噴火	鹿児島国体開催

（『鹿児島県の歴史』山川出版社 付録pp.14-15など、複数の資料を基に作成）

【資料9-6】

鹿児島県内の国道の一覧

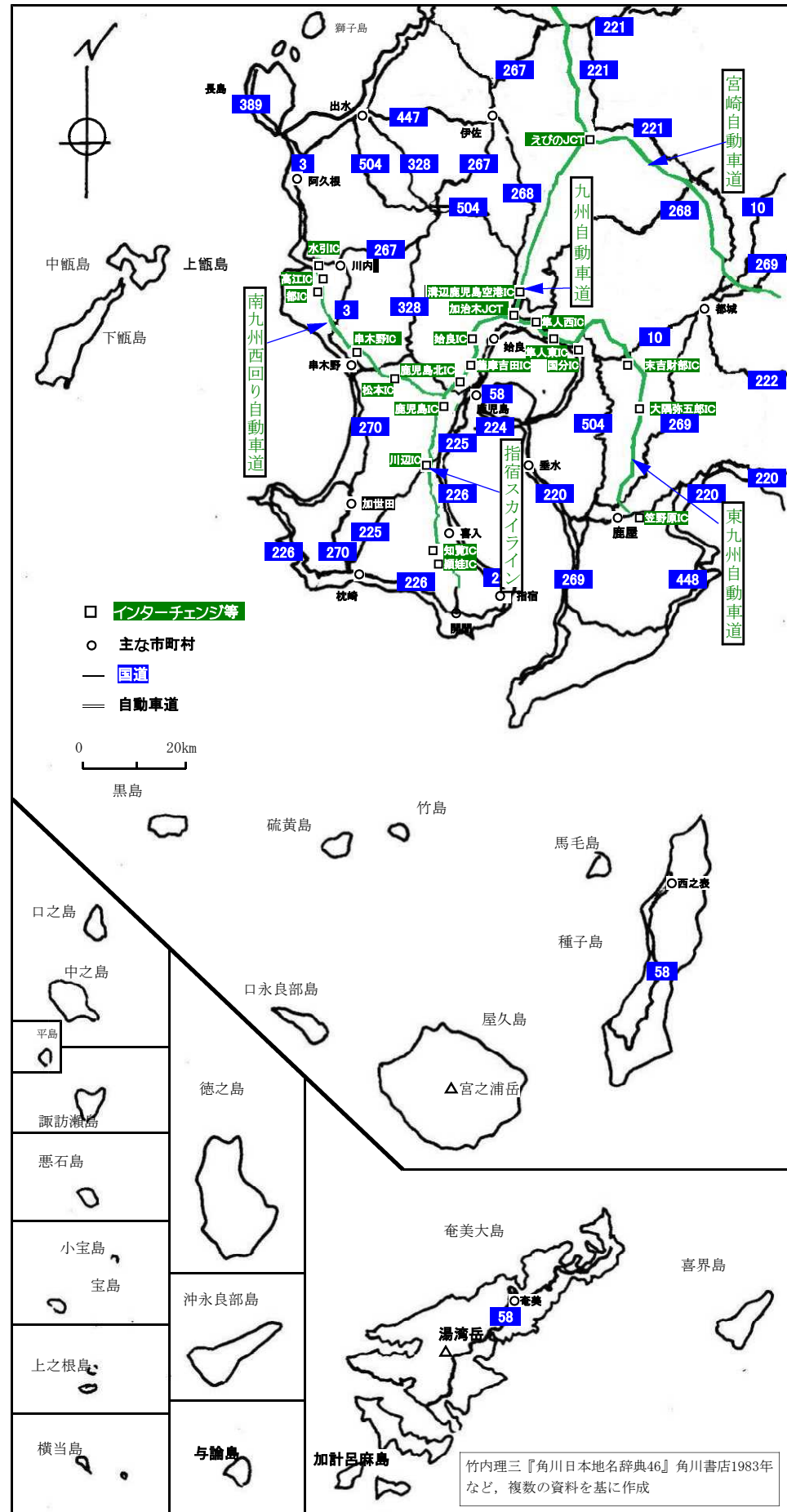
(km)					
名称	起点	終点	総延長	実延長	海上
3号	北九州市	鹿児島市	481.8	481.8	-
10号	北九州市	鹿児島市	551.8	539.1	-
58号	鹿児島市	那覇市	877.8	263.3	609.5
220号	宮崎市	鹿児島市	191.6	191.6	-
223号	小林市	霧島市	69.9	62.4	-
224号	垂水市	鹿児島市	22.9	13.5	8.8
225号	枕崎市	鹿児島市	52.2	52.2	-
226号	南さつま市	鹿児島市	156.7	142.2	-
267号	人吉市	薩摩川内市	79.2	79.2	-
268号	水俣市	宮崎市	114.4	94.8	-
269号	指宿市	宮崎市	174.9	149.1	17.0
270号	枕崎市	いちき串木野市	57.7	57.7	-
328号	鹿児島市	出水市	65.1	56.7	-
389号	大牟田市	阿久根市	170.7	121.2	17.0
447号	えびの市	出水市	60.2	56.7	-
448号	指宿市	宮崎市	249.8	119.5	-
499号	長崎市	阿久根市	70.1	29.1	41.0
504号	鹿屋市	出水市	165.0	126.4	-

（『道路統計年報』など、複数の資料を基に作成）

〔年表 9-1〕

《地図 9-2》 鹿児島県域における国道・自動車専用道路

年代	九州自動車道
1973	加治木IC⇄薩摩吉田IC間が開通
1976	溝辺鹿児島空港IC⇄加治木IC間が開通
1977	薩摩吉田IC⇄鹿児島北IC間が開通
1980	栗野IC⇄溝辺鹿児島空港IC間が開通
1981	えびのJCT⇄栗野IC間が開通
1988	鹿児島北IC⇄鹿児島IC間が開通 鹿児島ICで南九州西回り自動車道と接続
1989	八代IC⇄人吉IC(仮)間が開通
1992	加治木ICで隼人道路と接続
1995	人吉IC⇄えびのJCT間が開通 (これにより青森まで全線開通)
1997	八代IC⇄人吉IC間を4車線化
1999	肥後トンネルを4車線化
2001	加治木JCTで東九州自動車道と接続
2004	加久藤トンネルを4車線化 (これにより全線が4車線以上となった)
年代	東九州自動車道
1996	加治木IC⇄隼人東間の隼人道路が開通 以後延伸を続け
2014	加治木JCTから鹿屋串良ICまで開通し、大隅縦貫道と接続(これにより笠野原まで供用開始)。
年代	南九州自動車道
1988	鹿児島IC⇄鹿児島西IC間の開通 以後延伸を続け
2015	薩摩川内水引ICまで供用開始。

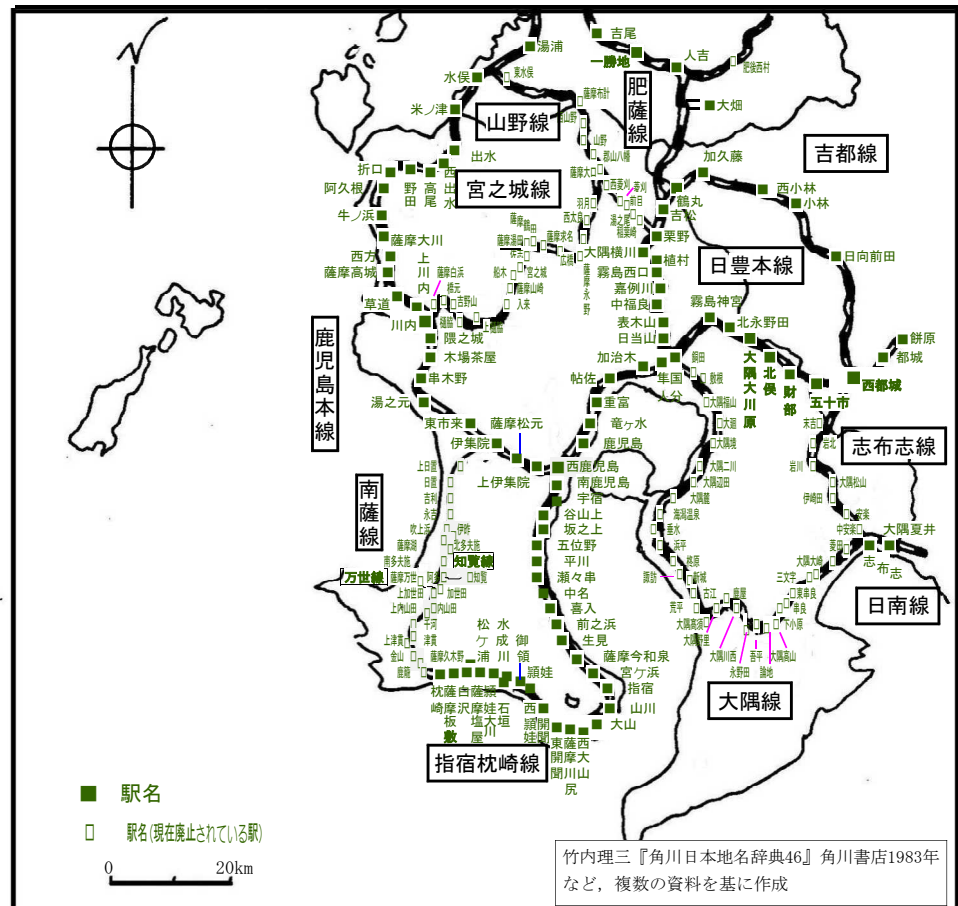


平成23年(2011)3月、鹿児島県民の長年の宿願であった九州新幹線（博多⇄鹿児島中央間）が全線開通した。

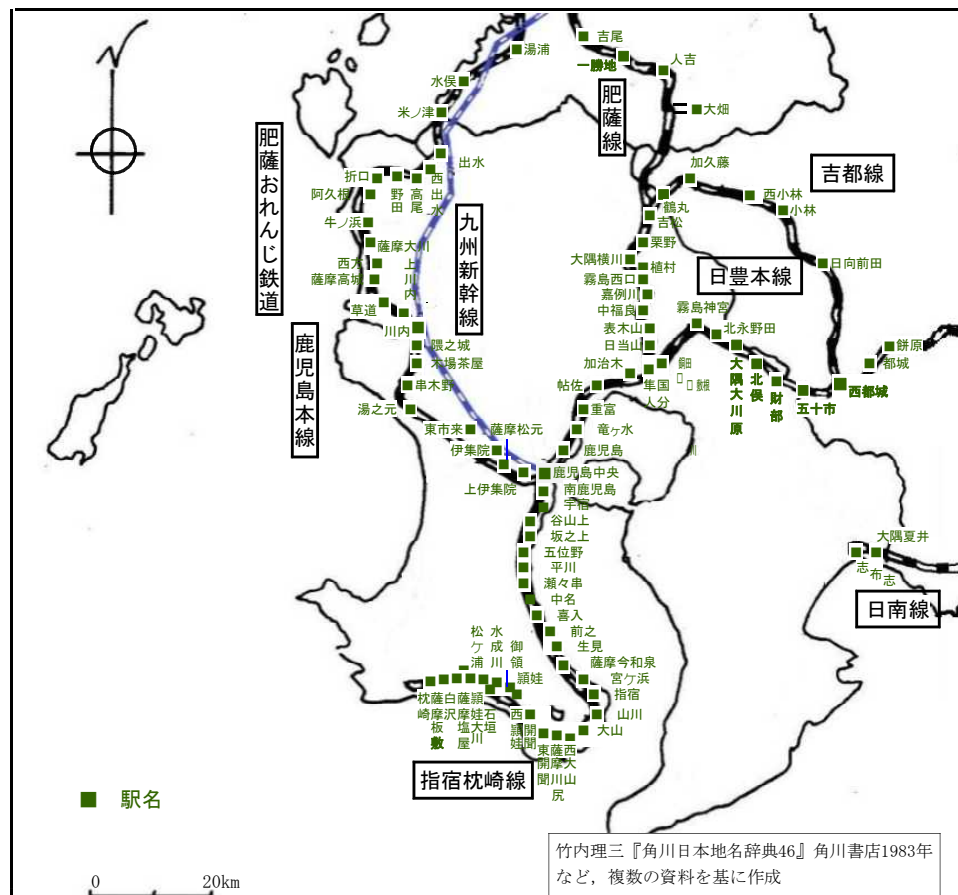
〔年表 9-2〕

《地図 9-3》 鹿児島県域における鉄道（昭和）

年代	主なできごと
1903	肥薩線国分⇄吉松間が開通
1909	肥薩線八代⇄鹿児島間全線開通
1915	南隅軽便鉄道線高須⇄鹿屋間が開通
1923	鹿児島本線川内⇄米ノ津間が開通
1926	宮之城線川内⇄宮之城間が開通
1927	鹿児島本線門司⇄鹿児島間が全線開通
1931	南薩線伊集院⇄枕崎間が全通
1932	日豊本線小倉⇄鹿児島間が全通 吉都線都城⇄吉松間が全通
1936	指宿枕崎線西鹿児島⇄山川間が全通
1937	宮之城線川内⇄薩摩大川間が全通 山野線栗野⇄水俣間が全通
1938	大隅線志布志⇄古江間が開通
1963	指宿枕崎線西鹿児島⇄枕崎間が全通 日南線南宮崎⇄志布志間が全通
1972	大隅線志布志⇄国分間が全通
1984	南薩線廃止
1987	宮之城線廃止 大隅線廃止 志布志線廃止
1988	山野線廃止
2004	九州新幹線鹿児島中央⇄八代間が開通 肥薩おれんじ鉄道開業
2011	九州新幹線鹿児島中央⇄博多間が全通



《地図 9-4》 鹿児島県域における鉄道（平成）



古代における遣唐《地図9-5》 鹿児島県域における離島航路

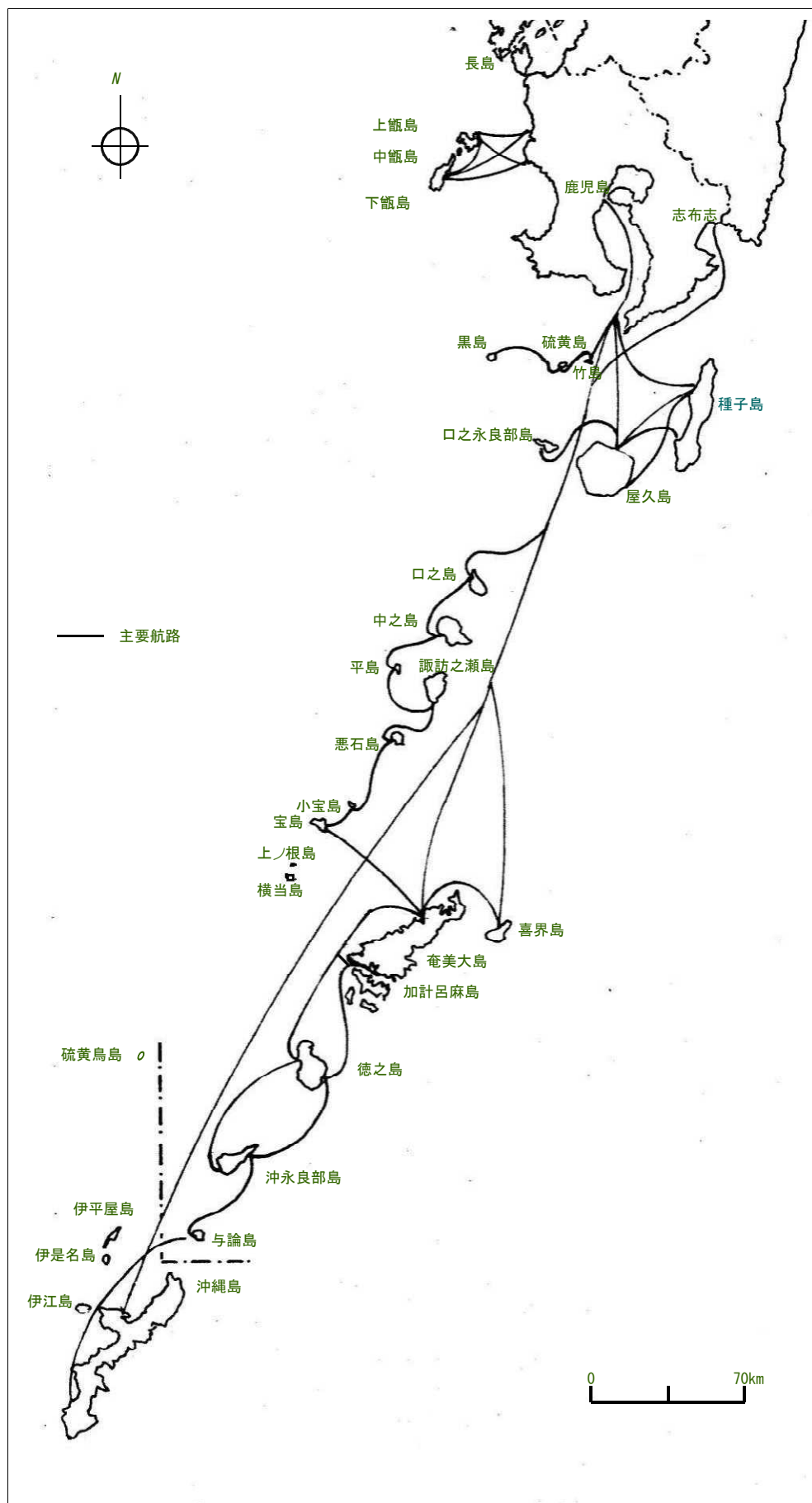
使の時代から鹿児島には南への航路が開かれていた。現在は港湾が整備され、大型貨客船が就航している（《地図9-5》）。

国内における中央との距離がもたらす辺境性が県民気質を育てて来たが、同時に南へ開かれている地理的な特性が、県民の先進性も育ててきた。鹿児島県には後進性と先進性を併せもっているという特徴があるのである。

平成16年(2004)10月、平成の合併第1号として、薩摩川内市が誕生した（《地図9-6》）。以後、各地で市町村合併が続き、平成22年(2010)の姶良市誕生で、鹿児島県内の市町村合併はひとまず落ち着いている（【資料9-7】）。

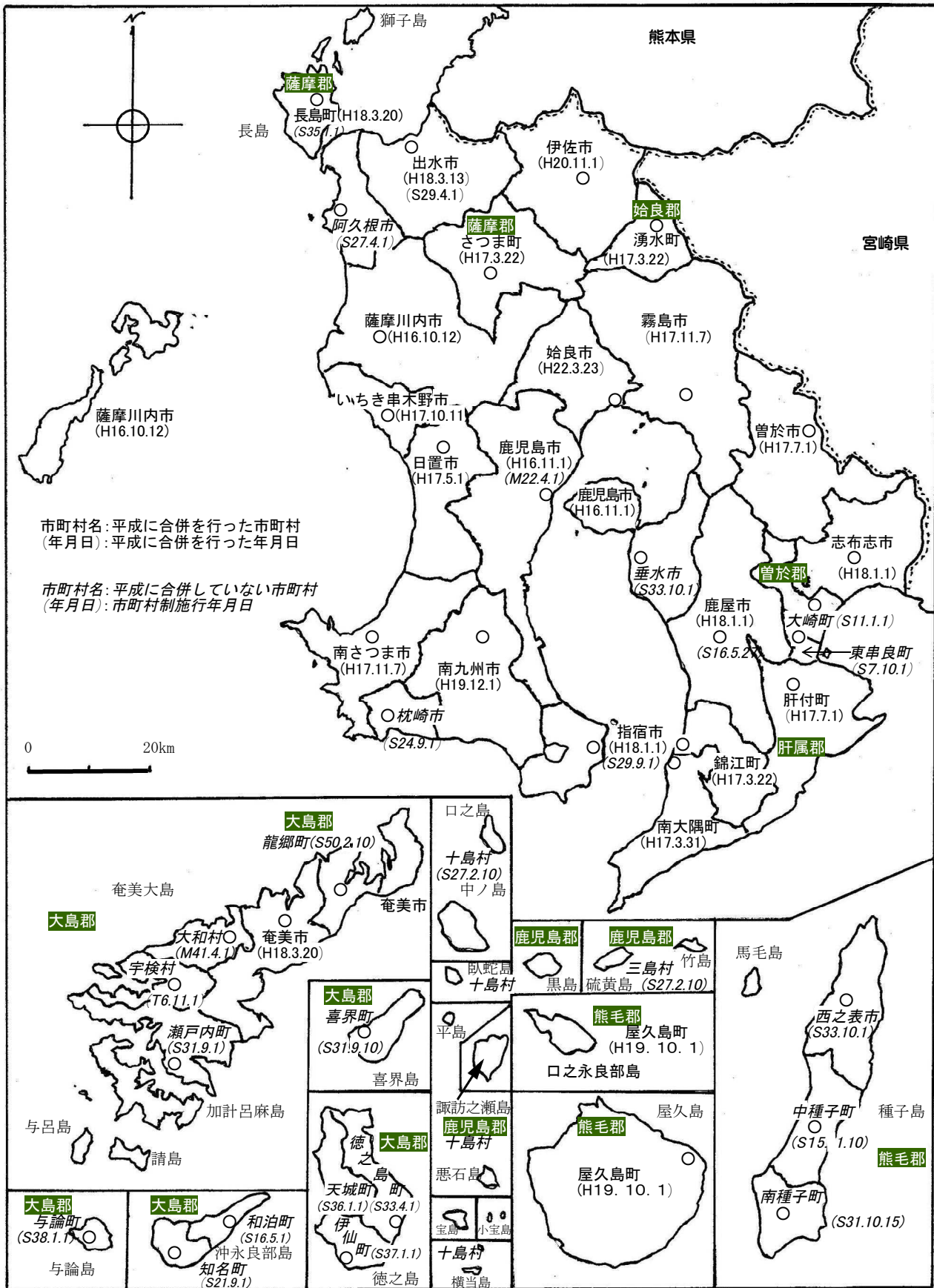
現在の市町村の枠組みは、それぞれの自治体内で、どのように合併するべきか、あるいは合併しないべきかという住民の判断の結果である。その判断には、その地方の歴史が大いに影響したと思われる。

今後、鹿児島県がどのように進んでいくべきかの判断にも、鹿児島県の歴史が影響を及ぼすことは間違いない。



（『中学校社会科地図』帝国書院など、複数の資料を基に作成）

《地図 9-6》 鹿児島県の市町村（平成の大合併以降）



(鹿児島県現行市町村区分図など、複数の資料を基に作成)

【資料 9-7】 鹿児島県における市町村の変遷

明治	大正	昭和	平成
佐多村 (M22. 4. 1)		佐多町 (S22. 9. 1)	南大隅町 (H17. 3. 31)
小根占村 (M22. 4. 1)		根占町 (S16. 1. 1)	錦江町 (H17. 3. 22)
大根占村 (M22. 4. 1)		大根占町 (S8. 8)	肝付町 (H17. 7. 1)
田代村 (M22. 4. 1)		田代町 (S36. 4. 1)	
内之浦村 (M22. 4. 1)		内之浦町 (S7. 10. 1)	
高山村 (M22. 4. 1)		高山町 (S7. 4. 1)	
東串良村 (M22. 4. 1)		東串良町 (S7. 10. 1)	
西串良村 (M22. 4. 1)		串良町 (S7. 5. 15)	
始良村 (M22. 4. 1)		吾平町 (S22. 10. 15)	鹿屋市 (H18. 1. 1)
鹿屋村 (M22. 4. 1)	鹿屋町 (T1. 12. 3)	鹿屋市 (S16. 5. 27)	
百引村・市成村 (M22. 4. 1)		輝北町 (S31. 4. 1)	
垂水村 (M22. 4. 1)	垂水町 (T13. 12. 1)	垂水市 (S33. 10. 1)	
大崎村 (M22. 4. 1)		大崎町 (S11. 1. 1)	
西志布志村 (M24. 2)		有明町 (S33. 4. 1)	
志布志村 (M22. 4. 1)	志布志町 (T2. 7. 1)		志布志市 (H18. 1. 1)
松山村 (M22. 4. 1)		松山町 (S33. 4. 1)	
岩川村・恒吉村 (M22. 4. 1)	岩川町 (T13. 4. 1)	大隅町 (S30. 1. 20)	曾於市 (H17. 7. 1)
末吉村 (M22. 4. 1)	末吉町 (T11. 10. 1)		
財部村 (M22. 4. 1)	財部町 (T15. 1. 1)		
福山村 (M22. 4. 1)	福山町 (S4. 11. 5)		
国分村 (M22. 4. 1)	国分町 (T15. 4. 1)	国分市 (S30. 2. 1)	
東襲山村 (M22. 4. 1)		霧島村 (S10. 7. 10)	霧島市 (H17. 11. 7)
牧園村 (M22. 4. 1)		牧園町 (S15. 4. 1)	
西国分村 (M22. 4. 1)	隼人町 (T8. 10. 10)	隼人町 (S32. 4. 1)	
西襲山村 (M22. 4. 1)	当山村 (T9. 1. 1)	町制	
溝辺村 (M22. 4. 1)		溝辺町 (S34. 4. 1)	
横川村 (M22. 4. 1)		横川町 (S15. 4. 1)	
栗野村 (M22. 4. 1)		栗野町 (S7. 4. 1)	湧水町 (H17. 3. 22)
吉松村 (M22. 4. 1)		吉松町 (S28. 2. 11)	
加治木村 (M22. 4. 1) 加治木町 (M45. 6. 1)			
帖佐村・重富村・山田村 (M22. 4. 1)		帖佐町 (S17. 4. 1) 始良町 (S30. 1. 1)	始良市 (H22. 3. 23)
蒲生村 (M22. 4. 1)	蒲生町 (S3. 11. 1)	山田村の一部を編入 (S30. 1. 1)	
菱刈村 (M22. 4. 1)		菱刈町 (S15. 2. 11) [本城村と合併 (S29. 7. 15)]	伊佐市 (H20. 11. 1)
大口村 (M22. 4. 1)	大口町 (T7. 4. 1)	大口市 (S29. 4. 1) [山野町・羽月村・西太良村と合併]	
上出水村 (M22. 4. 1)	出水町 (T6. 4. 1)	出水市 (S29. 4. 1) [米ノ津町と合併]	
高尾野村 (M22. 4. 1)		高尾野町 (S7. 4. 1)	出水市 (H18. 3. 13)
野田村 (M22. 4. 1)		野田町 (S50. 4. 1)	長島町 (H18. 3. 20)
東長島村 (M22. 4. 1)		東町 (S31. 7. 10)	
西長島村 (M22. 4. 1)		長島町 (S35. 1. 1)	
阿久根村 (M22. 4. 1)	阿久根町 (T14. 1. 1)	阿久根市 (S27. 4. 1)	
永野村 (M22. 4. 1)		薩摩町 (S29. 12. 1)	さつま町 (H17. 3. 33)
鶴田村 (M22. 4. 1)		鶴田町 (S38. 4. 1)	
宮之城村・山崎村・佐志村 (M22. 4. 1) 宮之城町 (T8. 7. 1)	[佐志村と合併 (S29. 10. 15)]	[山崎町と合併 (S30. 4. 1)]	
黒木村・鶴牟田村・大村 (M22. 4. 1)		郡谷院町 (S30. 4. 1)	
入来村 (M22. 4. 1)		入来町 (S29. 10. 1)	
樋脇村 (M22. 4. 1)		樋脇町 (S15. 11. 10)	
上東郷村 (M22. 4. 1)		東郷町 (S27. 12. 1)	
隈之城村・東水引村・平佐村 (M22. 4. 1)	川内町 (S4. 5. 20) 川内市 (S15. 2. 11)		薩摩川内市 (H16. 10. 12)
上飯村 (M22. 4. 1)			
里村 [上飯村から分立] (S24. 4. 1)			
下飯村 (M22. 4. 1)			
郡山村 (M22. 4. 1)		鹿島村 [下飯村から分立] (S24. 4. 1)	
吉田村 (M22. 4. 1)		郡山町 (S31. 9. 30)	
鹿児島市 (M22. 4. 1)		吉田町 (S47. 11. 1)	
谷山村 (M22. 4. 1)	谷山町 (T13. 9. 1)	谷山市 (S32. 10)	鹿児島市 (H16. 11. 1)
上伊集院村 (M22. 4. 1)		松元町 (S35. 3. 16)	
西桜島村 (M22. 4. 1)		桜島町 (S48. 5. 1)	
喜入村 (M22. 4. 1)		喜入町 (S31. 10. 15)	
指宿村 (M22. 4. 1)	指宿町 (S. 8. 5. 1)	指宿市 (S29. 9. 1)	指宿市 (H18. 1. 1)
山川村 (M22. 4. 1)	山川町 (S5. 5. 1)		
額娃村 (M22. 4. 1)		開聞村 (S26. 10. 1) 開聞町 (S30. 4. 1)	
知覧村 (M22. 4. 1)	知覧町 (S7. 4. 1)	額娃町 (S25. 8. 1)	
川辺村・勝目村 (M22. 4. 1)	川辺町 (T12. 10. 13)	[川辺町と勝目村が合併 (S31. 9. 1)]	南九州市 (H19. 12. 1)
田布施村・阿多村 (M22. 4. 1)		金峰町 (S31. 9. 30) [田布施村と阿多村合併]	
加世田村 (M22. 4. 1)	加世田町 (T13. 1. 1)	加世田市 (S29. 7. 15) [万世町を編入]	
西加世田村 (M22. 4. 1)	笠沙村 (T12. 1. 1)	大浦町 (S26. 4. 1)	南さつま市 (H17. 11. 7)
西南方村 (M22. 4. 1)		坊津村 (S28. 10. 15) 坊津町 (S30. 11. 1)	
東南方村 (M22. 4. 1)	枕崎町 (T12. 7. 1)	枕崎市 (S24. 9. 1)	
串木野村 (M22. 4. 1)		串木野町 (S10. 4. 1) 串木野市 (S25. 10. 1)	いちき串木野市 (H17. 10. 11)
西市来村 (M22. 4. 1)	市来町 (S5. 4. 1)		
東市来村 (M22. 4. 1)		東市来町 (S12. 4. 1)	
中伊集院村 (M22. 4. 1)	伊集院町 (T11. 4. 1)	[下伊集院村の一部を合併 (S31. 9. 30)]	
日置村・吉利村 (M22. 4. 1)		日吉町 (S30. 4. 1) [日置村と吉利村が合併]	日置市 (H17. 5. 1)
伊作村・永吉村 (M22. 4. 1)	伊作町 (T11. 12. 1)	吹上町 (S30. 4. 1) [伊作町と永吉村が合併]	
		三島村 (S27. 2. 10)	
十島村 (M41. 4. 1)		分断 十島村 (S27. 2. 10)	
北種子村 (M22. 4. 1)	西之表町 (T15. 7. 1)	西之表市 (S33. 10. 1)	
中種子村 (M22. 4. 1)		中種子町 (S15. 1. 10)	
南種子村 (M22. 4. 1)		南種子町 (S31. 10. 15)	
上屋久村 (M22. 4. 1)		上屋久町 (S33. 4. 1)	屋久島町 (H19. 10. 1)
下屋久村 (M22. 4. 1)		屋久町 (S34. 4. 1)	
喜界村 (M41. 4. 1)	早町村分立 (T8. 4. 1)	喜界町 (S16. 9. 13) [早町村と合併 (S31. 9. 10)]	
龍郷村 (M41. 4. 1)		龍郷町 (S50. 2. 10)	
笠利村 (M41. 4. 1)		笠利町 (S36. 1. 1)	奄美市 (H18. 3. 20)
名瀬村 (M41. 4. 1)	名瀬町 (T11. 10. 1)	名瀬市 (S21. 7. 1)	
住用村 (M41. 4. 1)			
大和村 (M41. 4. 1)			
焼内村 (M41. 4. 1)	宇検村 (T6. 11. 1)		
東方村・鎮西村 (M41. 4. 1)		古仁屋町 (S11. 4. 1) 瀬戸内町 (S31. 9. 1)	
亀津村 (M41. 4. 1)		亀津町 (S16. 12. 15) 徳之島町 (S33. 4. 1) [東天城村合併]	
天城村 (M41. 4. 1)	東天城村分立 (T6. 4. 1)	天城町 (S36. 1. 1)	
島尻村 (M41. 4. 1)	伊仙村 (T10. 6. 29)	伊仙町 (S37. 1. 1)	
和泊村 (M41. 4. 1)		和泊町 (S16. 5. 1)	
知名村 (M41. 4. 1)		知名町 (S21. 9. 1)	
与論村 (M41. 4. 1)		与論町 (S38. 1. 1)	

おわりに

本講座資料の作成に当たっては、『鹿児島県の歴史』（山川出版社1999年：原口泉氏・永山修一氏・日隈正盛氏・松尾千歳氏・皆村武一氏の共著）を大いに参考にしました。この1冊の書籍がなければ、鹿児島県の歴史を本当に理解することは難しいと思います。本講座をきっかけに鹿児島県の歴史を概観し、更に詳しく本県の歴史を調べてみたいと思われたなら、ぜひ、御一読していただきたいと思います。

また、それに先立つ県史解説書として原口虎雄氏による『鹿児島県の歴史』（山川出版社1973）という同名の書籍があります。今回、改めて同書を読み直し、氏の鹿児島県史に関する研究内容が幅広く深いこと、そしてその研究成果を分かりやすく解説していることを再認識させられました。1999年版を読まれたなら、順序は逆になりますが、1973年版も一読していただければ、更に鹿児島県の歴史が好きになれることと思います。

なお、竹内理三編『角川地名辞典46【鹿児島県版】』（角川書店、昭和58年）や、『詳説日本史研究』（山川出版社、1998年）なども本講座資料作成に際して引用させていただきました。

歴史の研究は、一から全て一人でできるものではなく、先達の研究成果を踏まえながら史料を基に考察し、自分なりの解釈や説明・論述をしていくものです。その作業は非常にデリケートであり、また深い知識と高度な技能がなければできません。従って、歴史の専門でない教職員が大学の教授のように、詳細かつ科学的な研究ができるとは必ずしも限りません。その意味で本稿も完璧ではありません。

しかし、身近な郷土学習においては、全ての児童生徒が自分なりに郷土について調べ、考察し、説明するということが可能です。その指導を行う教職員としては、郷土の歴史についてある程度の知識を有し、自らも調査・研究するという姿勢をもっていたいと思います。そのことによって、児童生徒の調べ学習に道筋をつけることができ、郷土教育が充実するのではないのでしょうか。

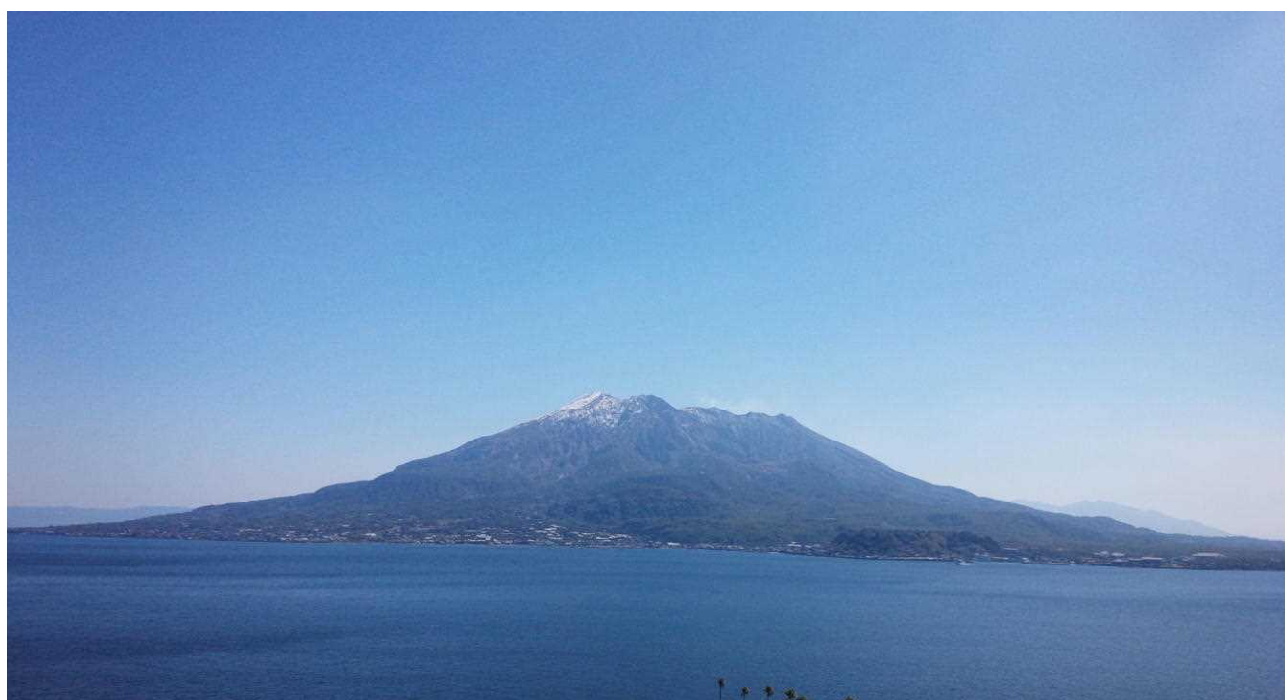
本講座資料が、その道しるべになれば幸甚です。

平成27年10月2日

（文責：鹿児島県総合教育センター 教科教育研修課 義務教育研修係長 大重満明）

引用・参考文献

- 原口泉、永山修一、日隈正守、松尾千歳、皆村武一『鹿児島県の歴史』1999年、山川出版社
- 原口虎雄『鹿児島県の歴史』1973年、山川出版社
- 五味文彦ほか『詳説日本史研究』2015年第8刷、山川出版社
- 詳説日本史図録編集委員会『詳説日本史図録』2014年、山川出版社
- 原口虎雄『幕末の薩摩』昭和41年、中公新書
- 芳即正『島津重豪』昭和55年、吉川弘文館
- 芳即正『調所広郷』昭和62年、吉川弘文館
- 竹内理三『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』昭和58年、山川出版社
- 竹内理三『角川日本地名大辞典 45 宮崎県』昭和61年、山川出版社
- 島津家資料刊行会『島津家正統系図』昭和61年、尚古集成館
- 児玉幸多ほか『史料による日本の歩み古代編』昭和33年、吉川弘文館
- 宗政五十緒校注『西遊記』昭和49年、平凡社（橘南谿『西遊記』の復刻版）
- 倉野憲司校注『古事記』1963年、岩波書店
- 南日本新聞社鹿児島大百科事典編纂室『鹿児島大百科事典』昭和56年、南日本新聞社
- 黒田安雄「安永・天明期における薩摩藩の動向」（『地方史研究』22）、昭和47年
- 大重満明「近世薩摩藩における藩主権力の構造」（『日本史論叢』）、平成8年



《冬の穏やかな桜島》